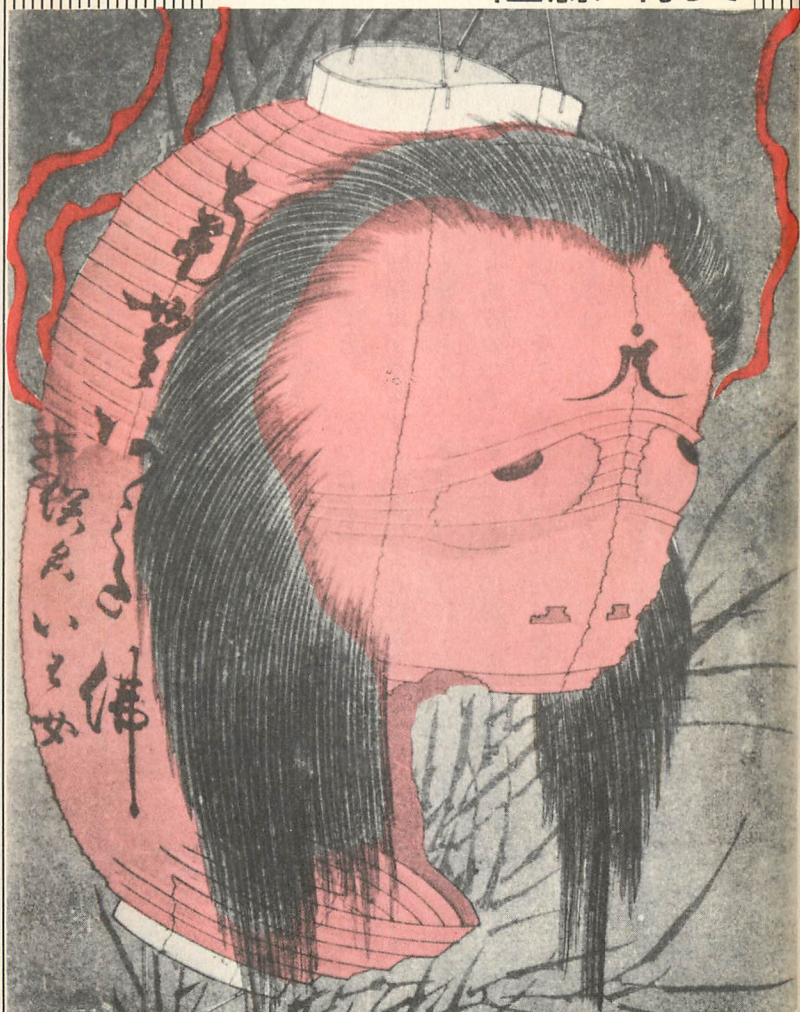
日本妖怪図鑑
佐藤　有文
カラー版

日本妖怪図鑑

佐藤 有文

発行・立風書房

日本の妖怪について

佐藤 有文

妖怪変化というと、すべて恐ろしく悪いことばかりするものと考えられています。ふしぎな超能力や恐ろしい魔力をもち、いろいろな姿に変身することのできる妖怪が、たしかに人間をだましたり、人間をおそってむざんに殺したりしたという話が、日本全国のあちこちにたくさんのこされています。しかし、妖怪についてくわしくしらべてみるといろいろなことが、次つぎとわかってきたのです。

まず、妖怪はかならずしも悪いことばかりするとはかぎらず、よいことをする妖怪もあり、ときには人間にすばらしい知恵をあたえてくれる妖怪もあるのです。そして悪人に対しては悪事を働いても、弱い人や正しいことをやっている人には助けをだすことがあります。

日本の妖怪は、やく千種類もあり、いまでも古い絵や資料がのこされているのは、およそ四百種類あることがわかりました。妖怪はすべて、昔の人たちがかってに空想でつくりあげたものだという人もいますが、カワウソのようにほんとうにいた動物もあるのです。それに人魂やきつね火などのナゾは、この、すばらしく科学文明の発達した現

◀恐ろしい妖怪〈首かじり〉

在でも、いまなおわかってはいないのです。

そして、このようなふしぎな超能力や魔力、変身の術をもっている妖怪は、なんと千年以上も昔から日本にすんでいましたが、じつは、いま大流行しているSF小説やマンガの主人公たちの先祖にあたるのが妖怪なのです。いろいろな超能力や変身の術などは、みな妖怪からひきついだものです。この本ではあまり知られなかった妖怪のナゾや超能力について、とくにくわしくしらべてみました。

日本の妖怪 もくじ

妖怪チャンピオン

河　童

川のふかい水の底にすんでいる河童は，子供たちが泳いでいると，足をひっぱっておぼれさせるという。いったい，河童はほんとうにこの世にいたのだろうか？

▶関東地方の利根川には，たいへんな数の河童がいてすごい勢力をもっていた。ネネコという女の河童親分が，子分をひきつれて利根川一帯でイタズラをくりかえしていたという。

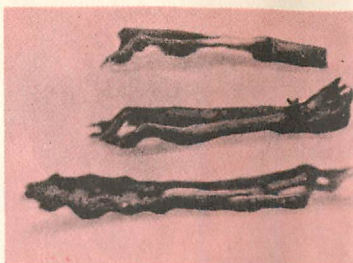
◀福岡県の太宰府にある河童のミイラ

河童のなぞ

北は青森から南は九州の鹿児島まで河童は全国いたるところの川にすんでいた。そのよび名も地方によってちがうが、背たけは約九〇～一二〇センチで、子供くらい。

背中にカメのような甲らをつけ、そのはだはぬめぬめと青黒く光っていた。緑色のはだをした河童もあってヘンになまぐさいようなにおいがした。

河童はとくに相撲ずきで、おかにあがって河童どうしで相撲をとっていたという。ときには人間に話しかけ相撲をいどんだ。ところが、河童はからだが小さいくせに、とても力が強く、人間の大人でも負けてしまって、うっかりすると、そのまま川の中へ、引きずりこまれてしまった。

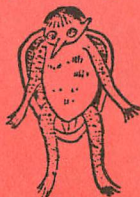
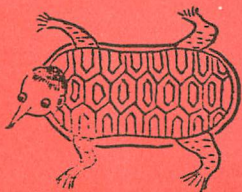
◀九州の河童は派ばつがいくつもあって、大分河童や熊本河童、福岡河童などにわかれていたという。なか、でも有名な親分は九千坊という河童だったが、利根川のネネコ親分にはかなわなかったとか。

▲福岡県久留米市にある河童の手の骨

また河童のイタズラは馬を川の中にひきずりこんで死なせたり、いけすの魚をぬすんだり、河童の大好きなキュウリ畑をあらしまわったり、子どものおしりの穴に手をつっこんで、しりの子をぬいてたべたりした。

しかし、頭のおさらの水がなくなると、とたんに、弱くなった。そこを人間につかまったり、刀で手を切られたりするとどんな傷でもなおるという薬をくれて、逃がしてくれとあやまったという。また河童の正体はカワウソという説もあるが、いまだにナゾはとけず、あるいはほんとうにいた動物の一種かもしれない。

▲カメ型の河童を表・裏・上からみた図。

鬼

頭に牛のような角を二本はやし、トラの皮のふんどしをして鉄棒をもった青鬼や赤鬼は、地獄にすんでいた。しかし、この地獄の鬼たちはやがて地上にあらわれて、さかんに人間をおそうようになった。だが、このような恐ろしい鬼は、どのようにして生まれ、どんな種類があるのだろうか。その正体をさぐると…。

▼青森県の恐山にある地獄そっくりの場所には，血の池がある。

▲青鬼や赤鬼，えんま大王がいるという恐ろしい地獄のようす。

▼地獄の鬼たちが，人間を石の板でおしつぶしている地獄のようす。人間の罪の重さによって，刑ばつも重くなったり軽くなったりする。

▼地獄の三つ目の鬼たちが，餓鬼の亡者にせまっているところ。

地獄の鬼たち

この世に地獄があると広く信じられるようになったのは、いまから千年以上まえの奈良時代からだ。その地獄には、えんま大王がいて、その子分が鬼である。地獄の鬼たちは、えんま大王が決めた人間の刑ばつを忠実に行なう役目をもっていた。

▼腰のところにある小づちでいろいろな魔術を使ったという鬼。

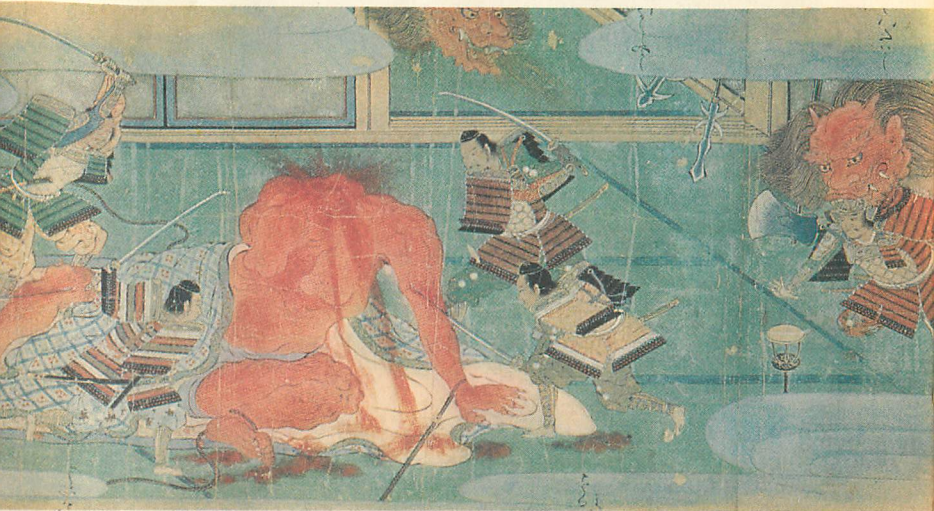
◎人間をたべる地獄の鬼

針山地獄とか火の山地獄、血の池地獄、氷地獄、石うす地獄などに人間をつれて行って、そこから逃げないように人間を見はるのだ。

そして、ときには人間の肉をたべたり、血をすったりしたという。だから、鬼は恐ろしい悪魔として、人間からものすごく恐れられたのだ。

「地獄へ行くと鬼にたべられるぞ！」というので、人びとはまず死んでも地獄へ行かないように、悪いことをしてはならないと考えるようになったほどである。

ところが、この地獄の鬼たちは、やがて地獄での仕事をさぼって、ときどき地獄の世界から地上にあらわれるようになった。もちろん、人間をおそって人間をたべたりしたので、鬼は妖怪のNo.1にのしあがってしまった。

▼京都の大江山にすんでいた酒呑童子という鬼の親分とその子分の鬼たちをたいじしたのが源頼光。酒の中に，しびれぐすりをいれてのませ，鬼の首を切ったという。

鬼たいじ

平安時代になると、鬼はさかんに地上にあらわれて、美しい女の人に化けたり、小さな子供になったり、あるいは美男子に化けたりして、人間に近づき、おそいかかって人間をたべた。

そこで、勇ましい武士たちが〈鬼たいじ〉に出かけ、鬼だけがしびれて動けなくなるというくすりを酒の中にいれてのませ、そのすきにたいじするという方法をとった。

ところが、こんどは鬼の恐ろしさを利用して、人間の山ぞくたちが鬼の面をかぶったりして、人間からお金や着物をぬすむことが大流行した。たとえば、有名な石川五右衛門なども、鬼の面をかぶって人間をおどろかせ、そのすきにゆうゆうとお金をかすめとったこともあるという。悪い人間が反対に鬼を利用したのである。

▲京都の羅生門にあらわれた鬼の腕を切ったという渡辺綱。

▶鬼はインドから中国をへて伝わった。

▲奈良時代にかかれた日本でもっとも古い鬼の絵。雪山童子という人が，鬼のいけにえになったという。

鬼の正体をさぐる

「鬼は外……福は内……」といって豆をばらまくのは二月四日の節分の日。

いまでは、悪いやつには〈鬼のような人だ〉とか〈〇〇鬼〉とか名づけて、鬼は悪の代表者になっている。節分の日に豆を投げつけて鬼を追いだすというのも、実は悪い病気だとか悪いことがおきないようにという意味がこめられている。

ところで、日本の歴史をかいた古書『日本書紀』などを調べてみると、鬼のことをアシキモノといって、鬼はすべての悪いことをする怪物ということになっている。つまり、千年以上の昔もいまも、鬼にたいする考えは、あまり変わっていないようだ。

しかし、この鬼がどこからやってきたのかをしらべてみると、インドから中国をへて日本へ伝わったらしい。鬼のモデルにな

▲いかにも恐ろしい姿にえがかれた鬼の絵。

ったのは、恐ろしい顔をした悪の神で、夜叉という妖怪からうまれたようだ。そしてこの鬼が地獄の世界にすみついていると信じられたのである。

ところで、昔は日本の海岸に船で難破して流れついた外国人を見て、ひどくびっくりし、「赤い鬼だ」と決めつけたこともあった。ひふが白くてハナが高く、背が大きくて赤っぽい髪の毛をした異国人をはじめて見た昔の人たちは、おどろきと恐ろしさのあまりに、鬼だと思いこんでしまったのだろう。

▲ユーモアのある鬼の絵。

天　狗

牛若丸（源義経）に剣術をおしえたという京都の鞍馬山の天狗をはじめ，全国の山々にすんでいた天狗とその子分・からす天狗の正体はなんだろうか。

19
ISHI
HARA

▼大天狗の子分・からす天狗。

▼これは九州にあらわれた大天狗で，人間より10倍も背が高い。

天狗のなぞとふしぎ

▼天狗は空を飛ぶこともでき，人間をさらって空を飛んだという昔の絵。

天狗の正体については、二つの説がある。ひとつは山の神説で、妖怪・ほうこうのようになん百年とたった古い木の妖精が天狗になったという考え。もうひとつは、天を飛ぶふしぎな妖魔という説である。しかし天狗は山にすんでいて、ものすごく背が高く、空を飛ぶ能力をもっているところから

▶神奈川県大雄山にある天狗の像。

山のぬしであるという考えが多いようだ。

ところで、天狗は赤くて高いハナを持ち足には鉄のゲタをはき、ふしぎなウチワをふると大風をまきおこすこともできる。たとえば天狗だおしといって、月のでている夜でも、森に大嵐がとつぜんおこって、大きな木がたおれたり岩がわれたりするということがあった。

ところが、そんな大嵐がおこったというのに、嵐がしずまったあとには木の葉一枚もおちていないのだ。さらに、天狗つぶてといって空から雨のように石がふってくることがあったという。昔の人たちは、このふしぎな現象を天狗のしわざにちがいないと考えたのだ。しかし、いまの科学者の考えでは天狗だおしの正体は、地震が原因ではないかといっている。

幽霊
人間は死んでから幽霊になるという。だれでも幽霊になれるのだろうか。幽霊の多くのナゾをさぐってみると……。

ISHI
HARA

▶この絵は、日本でもっとも古い幽霊の絵で、平安時代の菅原道真という人の亡霊だ。この道真の幽霊には、はっきりと足があり、道真をおとしいれた藤原一族に四十年間もたたったという。

幽霊には足があった！

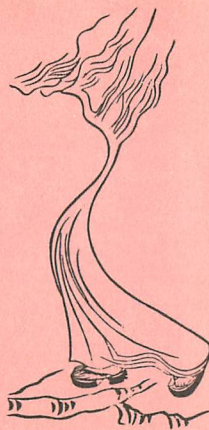
人間が死ぬと、だれでも幽霊になってでるのだろうか。幽霊がさかんにでるようになったのは、いまから六百年ほどまえの室町時代からである。このころから、人々は人間の死後の世界を考えるようになったからだ。

善人は死んで天国へ行くが、悪人は死ぬと地獄へおちる。しかし、天国へも地獄へも行けず、この世にさまよっている死人の魂が幽霊だと考えられていたのだ。

▲江戸時代の初期には，足のある幽霊がえがかれていた。

▶顔の見えない幽霊で、階段だけがギイッギイッと音をたてる。

▶ゲタをはいた二本足の幽霊が、カランコロンと足音をたてる。

▶影絵のような黒い幽霊で、音をたてない。

▲江戸時代の後期には，幽霊の芝居がものすごいブームになり，上の絵のように変わった幽霊がいろいろと考えだされた。

◀江戸時代の円山応挙がかいた幽霊の絵。

もし、生きていたとき善人であった人でも、まだこの世に、うらみがのこっている人は、死んでから幽霊になってあらわれるのだという。

ところが、幽霊についてよくしらべてみると、最初のうちはちゃんと足がえがかれていることがわかった。しかし、江戸時代の中期に、円山応挙という画家がはじめて足のない絵をかいたところ、みるからに恐ろしい姿となったので、大評判。それ以来、幽霊は足のないものと決められてしまったのである。

▶芝居で大評判の幽霊もの。

▼円山応挙は足のない幽霊に，さらに恐ろしさをだすためにうすい着物を着せて絵をかいた。

なぜ女の幽霊が多い？

幽霊には、たいへん女の幽霊が多い。いったいなぜだろうか。それは、生きていたときに、うらみやつらみが強かった人ほど幽霊になりやすいからだという。

とくに昔は、封建社会という女性にはきびしい世の中だったので、女の人はつらいことにもたえしのぶことが多かった。しかも、女性は感情が強く愛情も深いので、死んでから、うらみをのべることしかできなかったのだろう。

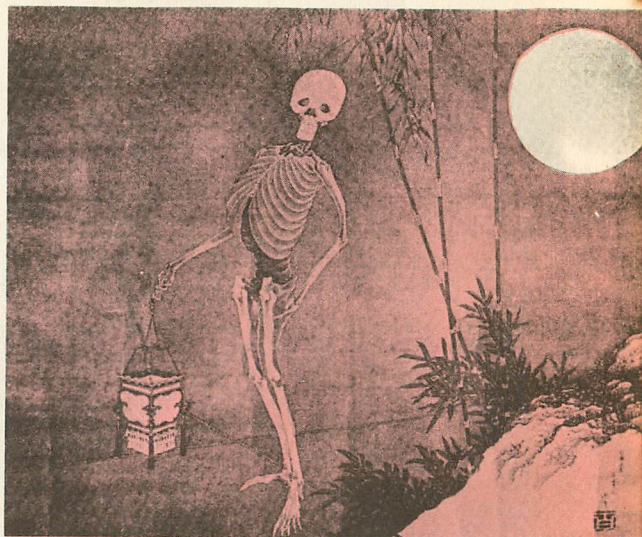
だから、女の幽霊ではなくても、自殺した人の幽霊はまだすこし、ひかえめだが、殺された人の幽霊はしつこくでる。だまされたり、おとしいれられたり、いじめられたりして殺された人は、死んでも死にきれないうらみがのこるので、幽霊は「うらめしやー」と、その相手の人にたたるのだ。

▲江戸時代の世界的に有名な画家〈北斎〉のかいた幽霊の絵。

▲奇形児の幽霊。指が3本ずつしかなく親の幽霊といっしょにあらわれる。

▼江戸時代のこと。おつゆという若い娘が，ある男の人を好きになったが死んでしまった。その亡霊が，ぼたんどうろうをともしてあらわれたが，恐ろしいガイコツだったという。

幽霊のいろいろ

▲白い蒸気のようになって出る白い幽霊。

幽霊には、いろいろとかわったものがいて、幽霊のくせに結婚を申しこんだもの、子どもをうんだ幽霊や火つけ専門の幽霊、生きている人そっくりに化けてあらわれる幽霊、さかさまになってでる幽霊など、さまざまだ。しかし、どの幽霊もとくに日光や強い風をきらい、夜おそくなると、古い友人や家族の人や恋人のところへあらわれる。幽霊はなまぐさいにおいをもっているので、すぐにわかるが、幽霊に手足をつかまれたりすると、そのにおいが着物にしみ

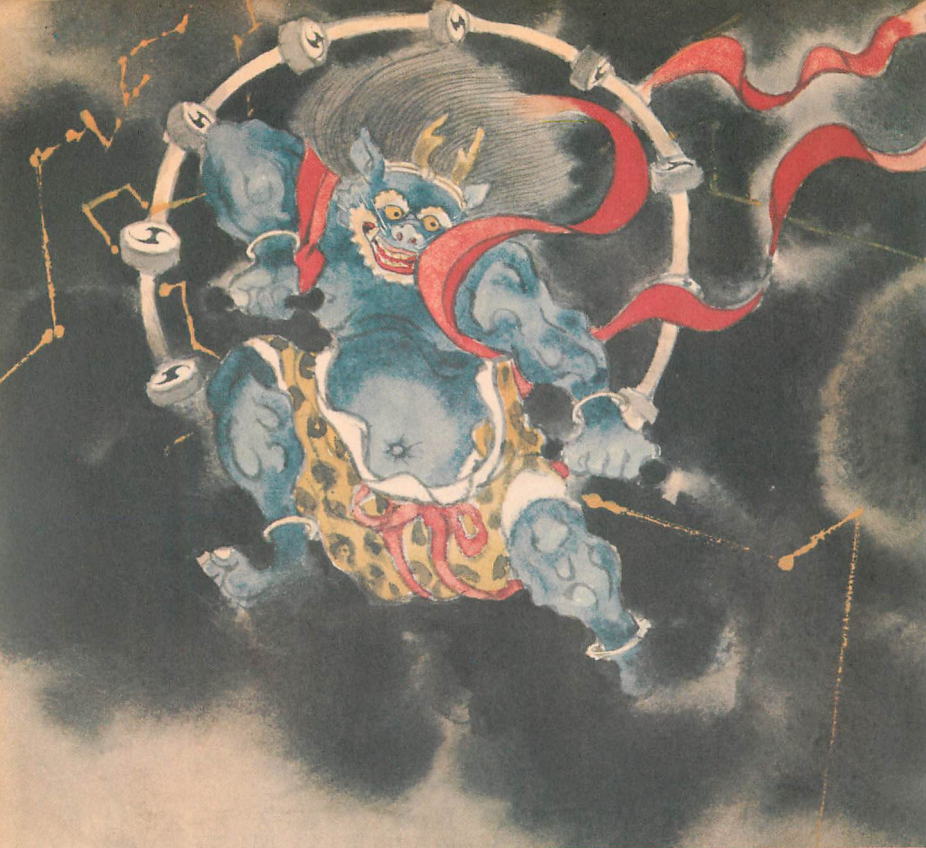
▼子連れ幽霊，赤ん坊のおしりのところが，ぶきみで悲しげだ。

ついて、なかなかとれないという。
しかし、幽霊はふつう、まったく知らない人のところへでることは少ない。なぜかというと、幽霊は不幸にさせられたり、だまされたことを、この世の人にうったえるために「うらめしやー」といったり、ふくしゅうしたりするからだ。だから、こらしめる相手の人のところへ、最初にあらわれるのがふつうで、自分をいじめた人間のそばにいないとさびしいのだそうだ。

▲墓場の幽霊。骨と皮ばかりの恐ろしい姿であらわれる。

風神・雷神

雷神は、鬼のような姿をしていて、トラの皮のふんどしをまとい、背中にはタイコをいくつも輪のような形につけていた。昔の人たちは、ものすごい雷の音をきいてびっくりし、恐ろしい魔力をもった雷神がタイコをたたいて音をだすのだろうと信じていたのだ。

平安時代の学者である菅原道真という人が死んで、そのうらみをはらすため雷になったという伝説もあったが、これはとくべつの例である。雷がなってイナビカリを発し、耳をつんざくばかりの大音響とともに、落下すると、大きな木がたおれたり、家がやけたり人間が死んだりしたので、恐ろしい妖怪というより、も

▲左のほうが雷神で，右のほうが風神。

っとすごい神さまというふうに考えられたのだ。そして雷さまは子供のヘソをとってたべるとまでいわれた。

また、風神はものすごい台風やつめたい北風をまきおこす神さまとして考えられた。大きなフクロから魔力を使って強い風や弱い風をだすものだと、昔の人たちは信じていたのである。

▲雷がおちて多くの人が死んだ昔の絵。

妖怪学①

▶ただ一度だけあらわれて、妖怪を殺したというふしぎな妖怪・白たく。

＊妖怪の分類

●幽霊
（霊魂がこの世にあらわれたもの）

- 人魂……うらみをもたない霊魂の火
- 生霊……生きている人ののろいが亡霊になる
- 死霊……死んだ人のうらみが幽霊になる

●妖怪
（ふしぎな魔力をもった怪獣や正体不明のもの）

- 人間の姿をしたもの……ろくろ首・雪女
- 動物の姿をしたもの……河童・九尾のきつね
- 人獣の姿をしたもの……女郎ぐも・人魚・鬼
- 魔力をもった怪獣……ほうこう・わいら
- 昆虫の姿をしたもの……かみきり・土ぐも
- 悪霊がとりついたもの……死神・うぶめ
- 空想でつくられたもの……キリン・ばく・ぬえ
- 正体のわからないもの……ちみ・もうりょう

●変化
（たぬきやきつね植物などが化けたもの）

- 動物……きつね・たぬき・てん・鉄鼠
- 植物……芭蕉の精・木だま・野づち
- 鉱物……殺生石・泣き岩
- 器物……ほうき神・蛇帯・お化けちょうちん

●超自然

- 正体のわかるもの……不知火・しんきろう
- 正体のわからないもの……鬼火・きつね火

1

動物の妖怪

動物の妖怪は、いったいどのようにしてふしぎな超能力をもったのだろうか。たぬきやきつねは、ほんとうに妖怪に化けたり人間をだますことができるのだろうか。いろいろな動物の妖怪の魔力をくわしくさぐってみて、そのナゾ多い秘密をあかしてみようではないか。

▲猫または美しい娘に化けるのがとくいだという。

ねこまた

かなり歳をとったオスのねこが，ねこまたになる。毛は黒ぐろとして黄色い毛がすこしまじり，尾の先が二つになり，大きいやつは3メートルにもなる。あと足で立って人間の声でしゃべり，死人をおどらせたり，人間を殺して，その人に化けたりするという。

▶愛知県岡崎の人くい化けねこ。全部でなんびきいるだろうか？

竜造寺家の化けねこの尾は，七つもあった。

化けねこの正体は？

ねこは、なぜ魔力をもつものと考えられたのだろうか。歳とったねこは、両足で立ちあがって食器だなの戸をあけたり、顔をあらうまねをすると雨がふったりするというのは、ほんとうのことである。

それに、魚をくってもそしらぬふりをしていたり、夜のくらいところで目がきき、ねずみをざんにんに殺してたべることなどから、そう考えられたのかもしれない。

しかし、女の人に化けて人間をくい殺したり、死体に魂をいれて生きかえらせるという化けねこの話には、だまされて殺された人のうらみがこもっているようだ。

化けねことなってたたるというのは、だまされて殺された、ねこの飼主の家の人々が、ふくしゅうのために完全殺人をはかり化けねこを利用したのだろう。

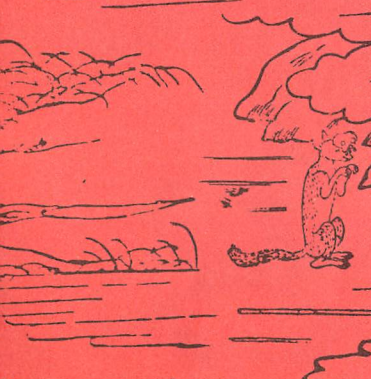
ね

▼佐賀県の鍋島家では竜造寺家の領地をのっとって主人を殺したところ，人間の血をなめた竜造寺家のねこが魔力をもち，女の人に化けて鍋島家の人をくい殺したという。

九尾のきつね

いまから800年 ほどまえ，中国やインドをあらしまわっていた九尾のきつねが日本にやってきた。美しい女に化けて皇居にもぐりこみ，そのときの鳥羽天皇を病気にさせて日本を征服しようとしたのだ。しかし，安部泰親という人の魔よけの呪文で正体をあらわすや空を飛び，いまの栃木県那須野が原へ逃げたという。

Ishi 39

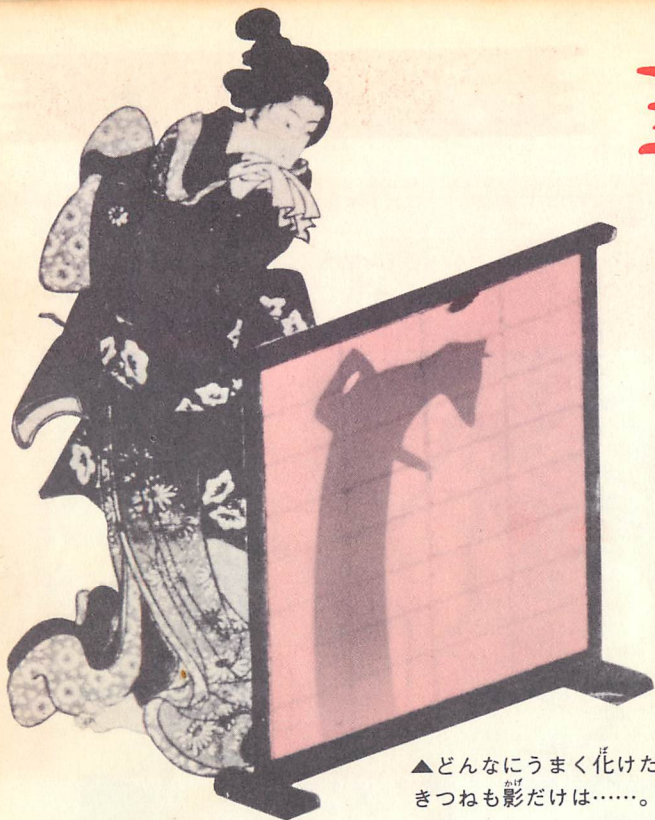
▼きつねは人間の死体からガイコツをかりてきて，頭の上にかかげ，北斗七星の方向を向いてほえると化けられる。

▶人間に化けたつもりのきつねが、まだ魔力がたりず、全身に毛がのこっている。

きつねの化けかた

きつねは、たぬきとくらべて、たいへんずるがしこく人間をだますのがとくいだ。

どこに、そんな魔力があるのか。歳をとったきつねは、しっぽがふえるといわれ、九尾のきつねなどは、それだけ魔力も強く栃木県の那須野が原に逃げてからも、いろいろな魔術を使ったという。そして三浦義明の矢をみけんにうけて死んだが、さすがは九尾のきつね。死んでもなお恐ろしい毒気をふきだす殺生石と化したという。

また、きつねはかれ葉を小判に見せたり馬のフンをふかふかのまんじゅうに見せたり、あるいは美しい女の人に化けて男の人をゆうわくしたり、なんでも自分の思いどおりに人間を動かすことができる。

これは、〈きつねつき〉といって、きつねが人間にのりうつって、人間の心をすべて

▼月のでた夜、植物のモを頭にかけて人間に化ける。

▲どんなにうまく化けたきつねも影だけは……。

よみとることをいう。テレパシーのように人間の考えていることをまえもって知ることができるので、人間をかんたんにだましたり、人間を自由に動かすことができるのだ。そして、さいみん術のように、

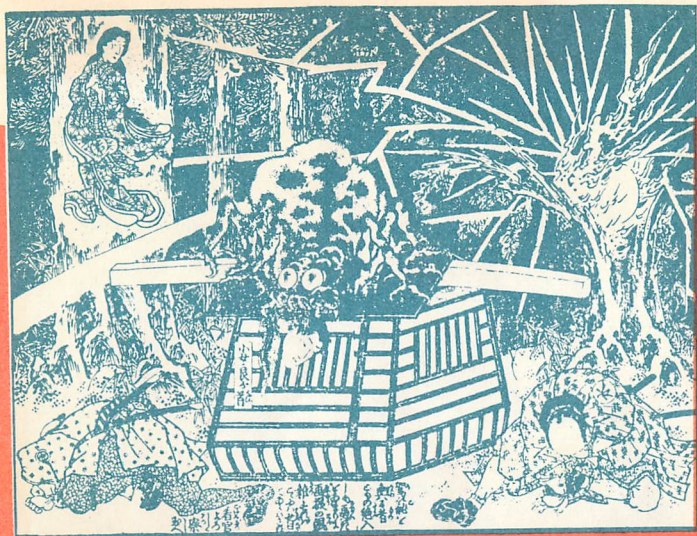
「あの木の葉は、黄金の小判だぞ！」

と、きつねにささやかれた人間は、まわりの人がなんといおうと、木の葉が小判だと思いこんでしまうわけだ。

しかし、きつねはどうしてそんな魔力をもつ動物と考えられたのだろうか。それはきつねがしっぽに火打石をまいて、石にたたきつけてきつね火〈96ページを見よ〉をもやしたり、植物のモ（これはくらやみで光るヒカリモだろう）やガイコツを頭にかかげている姿が、あまりにぶきみなので魔力をもつ妖怪と考えられたのではなかろうか。

だが、犬にほえられたり、ものに影がうつったりして、たちまち正体をあらわすという。

土(つち)ぐも

平安時代(へいあんじだい)のこと。源頼光(みなもとのよりみつ)という武将(ぶしょう)は，夜ごとに恐(おそ)ろしい妖怪(ようかい)に，おそわれたという。その妖怪(ようかい)どもをあやつっていたのは，ふしぎな魔力(まりょく)をもつ土(つち)ぐもだったのである。

＊小女郎ぐも

その昔，菊池家に家をほろぼされた若な姫は，なんとかしてかたきをうとうとした。そこへあらわれたのが，ふしぎなくも。若な姫にすっかり同情して女の姿に化け，菊池家の人びとをおそったという。

くもの魔力

昔から、朝にあらわれるくもはよいしるし、夜のくもは悪いことがある知らせという迷信があった。また、人をのろい殺す方法として、毒ぐもを使うという魔術もあった。それに、あやしげにくりだすくもの糸を見て、昔の人たちはすっかりくもの魔力を信じてしまったのだろう。

なかでも、土の穴に巣をつくる土ぐもなどは、《五化け七化け》といって、どのような妖怪にでも化けることができる超能力をもっていると考えられていた。

源頼光の館にあらわれた土ぐもは、なんと四十四種類もの妖怪を一本一本の糸であやつって、頼光をせめたてたという。

また、くもは人間の魂をたべて魔力をつけるともいわれ、恐ろしい女郎ぐもなどはそのよい例だろう。

昆虫の妖怪

＊かみきり

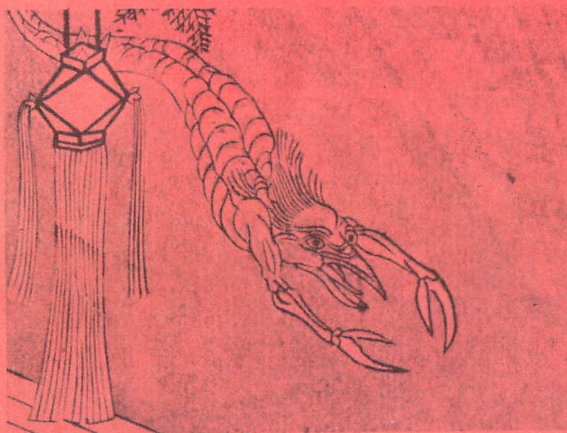
江戸時代のこと。髪を長くした若い娘たちは、つかまえようのない妖怪・かみきりをひどく恐れていた。

お玉さんという娘は、ある夜ひとりで便所へ行くと、くらやみの中にギラギラ赤く光るものをみた。大きさ五〇センチほどのぶきみなものが、天井にはりついているのだ。はっとして逃げようとしたとたん、お玉さんは、キャッと悲鳴をあげた。

「バサッ！バサッ！」と頭の髪の毛を切られたのだ。ひっしになって手ではらいのけたが、さっぱり手ごたえがない。

それもそのはずで、妖怪・かみきりは、人間には姿が見えても、空中に姿がうつっているようなもので、まったくとらえようがないのだ。そして、お玉さんは頭の毛を切られてまる坊主にされてしまったという。

＊あみきり

昔は，いたずらがすきな妖怪・あみきりがいた。夏のカよけに使うか・や・の麻糸のにおいが好きで，真夜中になるとか・や・をズタズタに切ってしまった。人間の寝いきをうかがうのがたくみなので，人間がおきているときは，絶対に姿をあらわさない。

昔の女の人たちは、あまりに貧しくなると自分の髪の毛を切って、かつらを作る商人に売ったというが妖怪・かみきりはそのうらみ？

＊つつが虫

つつが虫は，毒気をはいて人間の血をすう妖怪と考えられていた。血を吸われた傷口が，どろどろにくさり，ひどく高い熱がでると全身がいたみだして狂い死にしてしまうのだ。しかし，これはつつが虫がもっている伝染病リケッチア菌が原因だと，いまの医学ではわかっている。

人間の髪の毛には魂があるともいわれているが、他人に売りわたされた、髪の毛のうらみがこの妖怪になったという。

火吹き鳥

一八一六年のこと。肥前（長崎県）の国に、ふしぎな鳥があらわれた。

その日の夜おそく、まっくらな空がとつぜん夕やけのようにそまったので人々が、おどろいて外へ出てみると、大きさが数十メートルものまっ赤な鳥が飛んでくるではないか。

そして、怪鳥は口からものすごい火をはき、あっというまに家をやき森をやいて飛び去ったという。

青さぎの火

青さぎという鳥は、神の使いの鳥として、たいへんめずらしいと信じられていた時代があった。
　ところが、よくに目がくらんだ人が、この青さぎのひなをとって
「この鳥をかうと、よいことがまいこんでくる」
と売ってあるいたのだ。
　それから、まもなく、夜になると青い光をはなちながら飛んでくる鳥があらわれた。青さぎの親どりだ。ひなをかっている家にやってくると、パッとものすごい光をはなち、その家の人ばたちまちめくらになってしまったという。

＊いつまで

うえ死にをしたまま、ほうっておかれた死体があると、どこからともなく、そのにおいをかぎつけて飛んでくる鳥があった。

＊化けひなどり

昔のお坊さんは、肉をたべてはいけないという、きびしいおきてがあった。しかし、あるお坊さんは、こっそりとにわとりの肉をた

その鳥は、竜のようなしっぽに、頭は鬼のような姿で、死体をがつがつとくいちぎった。

そして、うえ死にをした人の家族のところへ飛んで行くと、

「いつまで、死人をほうっておくのだ！」

と人間の声でしゃべるのだ。しかし、あわてて家族の人が死体をさがしても、死体はなく、いつまでもこの怪鳥にたたられるという。

べてみて、おどろいた。その、おいしいことといったら、思いだすだけで、よだれがでてくる。そこで、お坊さんは、村の家にしのびこんでは、にわとりのひなをぬすんでたべた。

そして、村の人びとに、「生きものを殺してはならぬぞ」といってあるいた。しかし、この悪行におこったひなどりの魂が、とうとうお坊さんにのりうつったという。

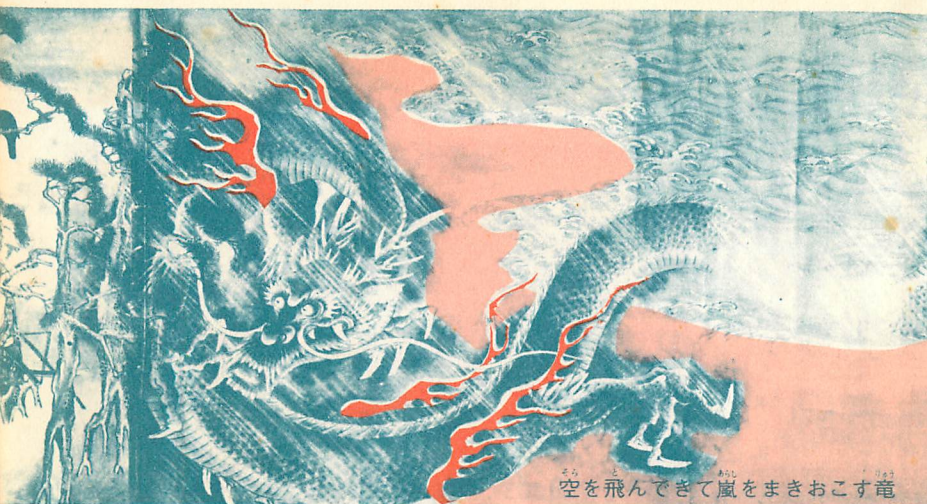
竜

▼竜は，神があやつる動物ともいわれているが昔の古い本には，仙人が竜にのって空を飛んでいるようすが，えがかれているものもある。

竜の超能力

竜は、千年以上も昔からあらわれたふしぎな妖獣で、中国からやってきたともいわれている。昔の人たちは、竜があまりにもいろいろな魔力を使うので、恐ろしい妖獣

②安珍を追う清姫は，うらみの火をはく。

①清姫と安珍

空を飛んできて嵐をまきおこす竜

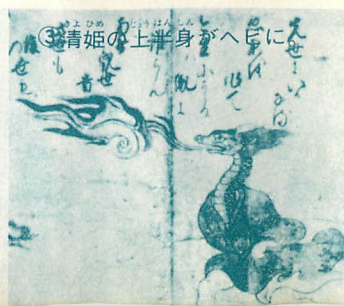
というよりは、水の神としてうやまったという。

竜は、まず雷をおこし、風や嵐をまきおこし、雨をふらせ太陽をくもらせたりすることができた。そして、この世のどんな動物や人間にも自由に姿を変えることができ空中にパッと消えたり、あらわれたりする魔力をもっていた。

また、竜が天にのぼるときは、自分の息をはいて雲をつくり、その雲にのって空へのぼった。空を飛んでもジェット機のように速く、おまけにどんな武器で切りつけても、けっして死ぬことはない。妖獣のなかでも、まさにNo.1の超能力者だ。

この竜は、大蛇が強い魔力をつけて変身したものという説もあるが、下の絵の清姫の場合は、人間がヘビになり竜に変身したのではなく、はじめから竜が清姫に姿を変えていたとも考えられるのだ。

③清姫の上半身がヘビに

④そして竜になった。
(101ページ参考)

野ぶすま

木から木へ、谷から谷へとコウモリのように羽をひろげて飛ぶ。しかし、コウモリとちがって全身に毛がはえ、つばさにも肉がついている。足は四本、どれもみじかくて、するどいツメをもっている。ふつうは森の中にいて、木の実などをたべておとなしいが、人がやってくると、ものすごい早さで飛んでくる。森の中のナワバリをあらされたくないのだ。目に見えぬほどの早さで、急せんかいし顔といわず手足といわず、ツメでえぐるのだ。また、火にもへいきなので、たいじするのはむりだ。

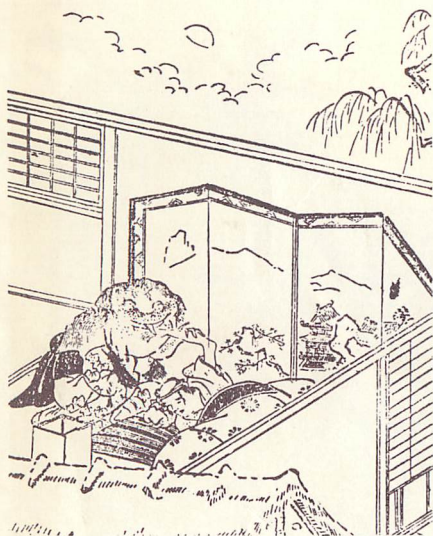
*らいごう

らいごうは、〈鉄鼠〉とも書くが、鉄よりもするどく固い歯をもったねずみのボスだ。頭の毛を一本ぬけば、ねずみが百ぴき、十本

*化けガマ

青いコケがはえて岩のようにずんぐりした大ガマ。そんな年とったガマは、恐ろしい魔力をもっている。

で千びきのネズミが、一瞬にして飛びだしてくるという魔術を使うのだ。
その昔、比叡山と三井寺のお坊さんどうしが戦ったことがあったが、三井寺の頼豪阿闍梨という坊さんは、このネズミの大ボスにたのんで、自分から、らいごうに変身し、八万四千びきのねずみをひきつれて比叡山をおそったという話がある。

ヘビはカエルをにらみつけて、のみこむというが、この大ガマは反対に口からすうっと煙のようなものをはいて、ヘビをのみこみ、腹の中でヘビをとかしてしまう。まるで硫酸のような毒けむりを口からはくのだ。
ときには、人間に化けて女の人になり、男の人をゆうわくして、だんだん病気を重くしてゆくという。化けガマにとりつかれたら、骨と皮ばかりになって死ぬしかない。

ひ　ひ

山奥に住んでいる妖獣ひひは、大きさ五メートル。ものすごい怪力で、いのししやくまを一げきのもとにたおし、それをバリバリッとひきさいて、骨ごとむしゃむしゃっとくった。

もちろん、人間もおそってくい殺したが、とくに好んだのが若い娘。里の村にあらわれて、娘をいけにえにささげないと大あばれした。そこで、岩見重太郎という剣豪が若い娘の着物をきて、ひひに近づき、ただひとつの弱点であるひひのみけんに切りつけて、やっとたいじしたという。

*手おい蛇

「ヘビは、恐ろしくしゅうねんぶかいやつだ。けっして半殺しにしたまま、逃がしたりするな。かならず、復しゅうにくるからな」

*牛巻

牛巻は、長さ十五メートルもある大蛇で、牛や馬に巻きついて、沼の中へひきずりこんだ。牛が水でおぼれ死ぬと、口からものすご

昔の人は、よくこんなことをいったものだ。ところが江戸時代のこと。伝三という人は、そんなことがあるものかと、ヘビを見つけては半殺しにしてあざ笑った。それから四年、伝三は山奥の村から江戸の町に住んだが、手おい蛇は江戸まで追ってきたのだ。

傷つけられたヘビが全部で二十五ひき。ヘビは伝三の全身にくらいつき、目玉をえぐって頭の中までもぐりこんだという。

い火をはきだし、その肉がビフテキのようにこんがりと焼けると、大きな口をひらいてパクリとのみこんだ。いまの愛知県名古屋市ふきんの沼にすんでいたと伝えられている。

風狸

この動物妖怪は、風の狸と書いて風狸とよむ。文字どおり、風のように空中を飛んできては、一つ目大入道になったり、黒坊主になったりして、人間をおどろかす。
ただし、この風狸の姿は空気のように透明で人間には見えない。とつぜん山の向こうに、雲をつくような大男があらわれたかと思うと風のように空中からすうっと消えてしまうからだ。しかし、ある人が夜中に三つ目の大入道と出あいびっくりしてタイマツをつきつけると、たぬきににたものが、空中を矢のように飛んだという。

*野鉄砲

犬とたぬきのあいの子のような姿をしたマミという動物がいる。穴ぐまの一種だ。
この野鉄砲は、そのマミが年をとったもの

*雷獣

雷獣は、ものすごい雷光をひらめかす雷さまの子分なのだろうか。昔の人たちは、雷の落ちたあとなどに、動物の毛がちらばってい

で、ふしぎな術を使うという。
森の奥や山の谷間にすんでいて、人間がとおると、口から小さなコウモリのようなもののを吹きだすのだ。すると、急に目が見えなくなり、足がしびれて動けなくなる。そのすきに野鉄砲は、食物をかすめとるという。

るのを見て、それが雷獣の毛だと信じた。
黒い雨雲が、にわかに空にたれこめると、きっと雷獣が目にもとまらぬ早さで空にかけあがり、ピカピカ・ドーンと雷といっしょに落ちてくる。そして、また雷獣は雲につつまれて空へのぼるのだという。
ところが、最近のこと。雷獣とそっくりな動物が日本アルプスの山中で発見され、それがどうして雷さまの子分といわれたのか、多くの学者もただ首をかしげているばかりだ。

わいら
Ishii

ライオンとクマのようなからだ、手足にワシのような鋭いつめをもっている。また、二つの羽もあるので、いったい鳥なのか猛獣なのか見わけのつかない妖怪だ。ふつうは、山の奥の岩のあなの中に巣をかまえて、鳥やけものなどをたべているが、はらがへると人間をおそって骨までたべつくしてしまう。

牛鬼

牛鬼は，島根県の温泉津地方によくあらわれ，牛のようなツノをもった海の妖怪だ。昼は海の底にねむっているが，夜になると漁船をみつけ，どこまでも追いかけてくる。漁師がとった魚をみんなたべ，それでもたりないときは上陸して人家をおそう。ただし，お守りをかざすと逃げて行く。

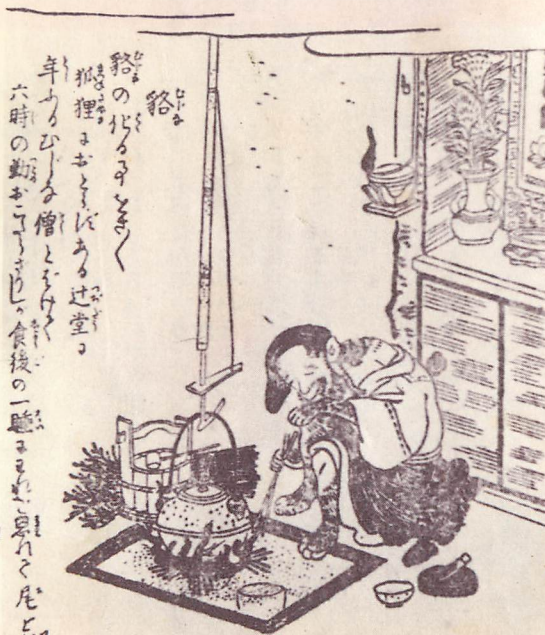
＊かわうそ

カワウソは、川の中にすんでいる四つ足の動物だ。水をおよぐのがはやく、水中でツバメ返しのように身をひるがえす。

＊むじな

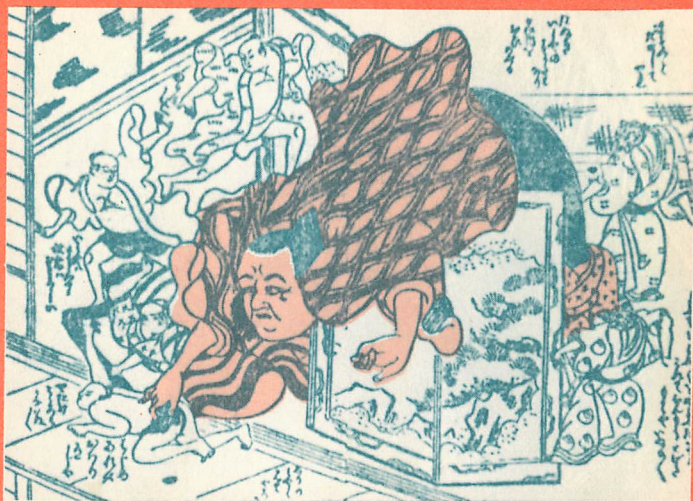
むじなは、老人に化けるのがとくいで、家の中にはいると、どっかりあぐらをかき、いろりにかけてあるナベのものをたべてしまう。

しかし、カワウソは水の中ではほとんど人間をおそったりはしない。ただ、川岸をとおる人をびっくりさせたり、足をひっぱっていたずらをするくらいのものだ。

ときには男の姿に化けたりするが、魔力がたりないので、やぼったいかっこうだ。それで女の子に話しかけても、たちまち正体がばれてしまうということだ。

ところが、うっかり昼ねをして、しっぽをだし、正体をみやぶられてしまうことが多い。

この、のんびり屋の妖怪・むじなは、じつは、たぬきとまったく同じ動物で、明治時代には裁判が行なわれたことがある。まぬけなたぬきのことを、むじなというのだそうだ。

たぬき

▼ものすごい巨人に化けて人間をおどろかし，とくいになっているたぬき。

たぬきの化けかた

たぬきは、たいへん悪どいきつねにくらべて、おっちょこちょいで人間をおどろかしては、よろこんでいる。

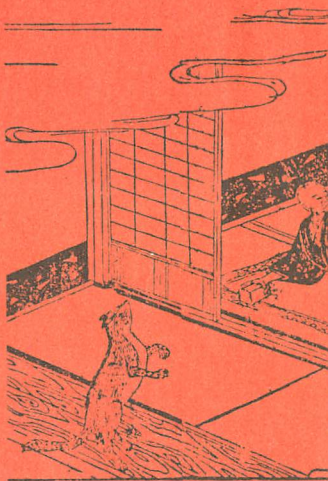
一つ目小僧や三つ目大入道、のっぺらぼう、大男などに化けるが、人間をくい殺したりすることはまずない。ただし、カチカチ山のたぬきと黒坊主に化けることができる古だぬきだけは、人間を殺すことがある。

しかし、たぬきはあわて者なので、茶がまに化けておしりに火がついたり、美しい女の人に化けて急におならをプーッとしてしまい、とたんにしっぽをだしたりする。

また、おいしいものがあると、あわてて手をだしたのはよいが、まず人間に化けることをわすれてしまったりするのだ。

ところが、そんなたぬきも猟師に追われたときだけは、奥の手をつかう。

◀ぶんぶく茶がまに化けたという群馬県の茂林寺のたぬき

▼月夜の光を利用して，影絵で人間をびっくりさせるたぬき。

ダーンと銃声が鳴るや、たぬきはコロリとたおれて死んだふりをするのだ。その演技力は超一流で、猟師もすっかりだまされる。猟師が肩にかついだたぬきを地面におろし、昼めしのにぎりめしをと思って腰の袋に手をやると、にぎりめしがない。

そのわずかなスキをねらっていたたぬきは、むくりと起きあがってドロン。もちろん、にぎりめしは死んだふりをしたたぬきが猟師の背中にぶらさがりながらたべてしまったのだ。

また、たぬきの大ものになると、きつねとの化かしあいでも負けてはいない。きつねが、おれは七変化ができるぞといえば、たぬきは一度に大名行列をだしてみせるという。やがて大名行列があらわれた。

きつねが、「これはまいったよ」というと、大名行列はほんもので、たぬきが前もってしらべておいたものだったという。

妖怪学②

＊つくられた妖怪たち

▶鳳凰という鳥は、神の使者として考えられた不死鳥だった。

妖怪のなかには、はじめから人間の空想でつくりあげられたものがある。たとえば、人間に恐ろしい夢を見させる妖怪のばく、古いぞうきんをたいせつにしないと化けて出るという白うねりなどである。

また、むかしの人たちの宗教とむすびついて考えられた鳳凰や空を飛んでくるという天馬、雷や風をまきおこすと考えられた雷神・風神などは、妖怪というよりも神さまとしてあつかわれている。

さらに、からだはシカで尾は牛、足は馬の姿をしているというきりんやひひとヘビとトラの姿をしたぬえなどは、恐ろしい姿を強くあらわすために、そのような姿にされてしまったのではないだろうか。

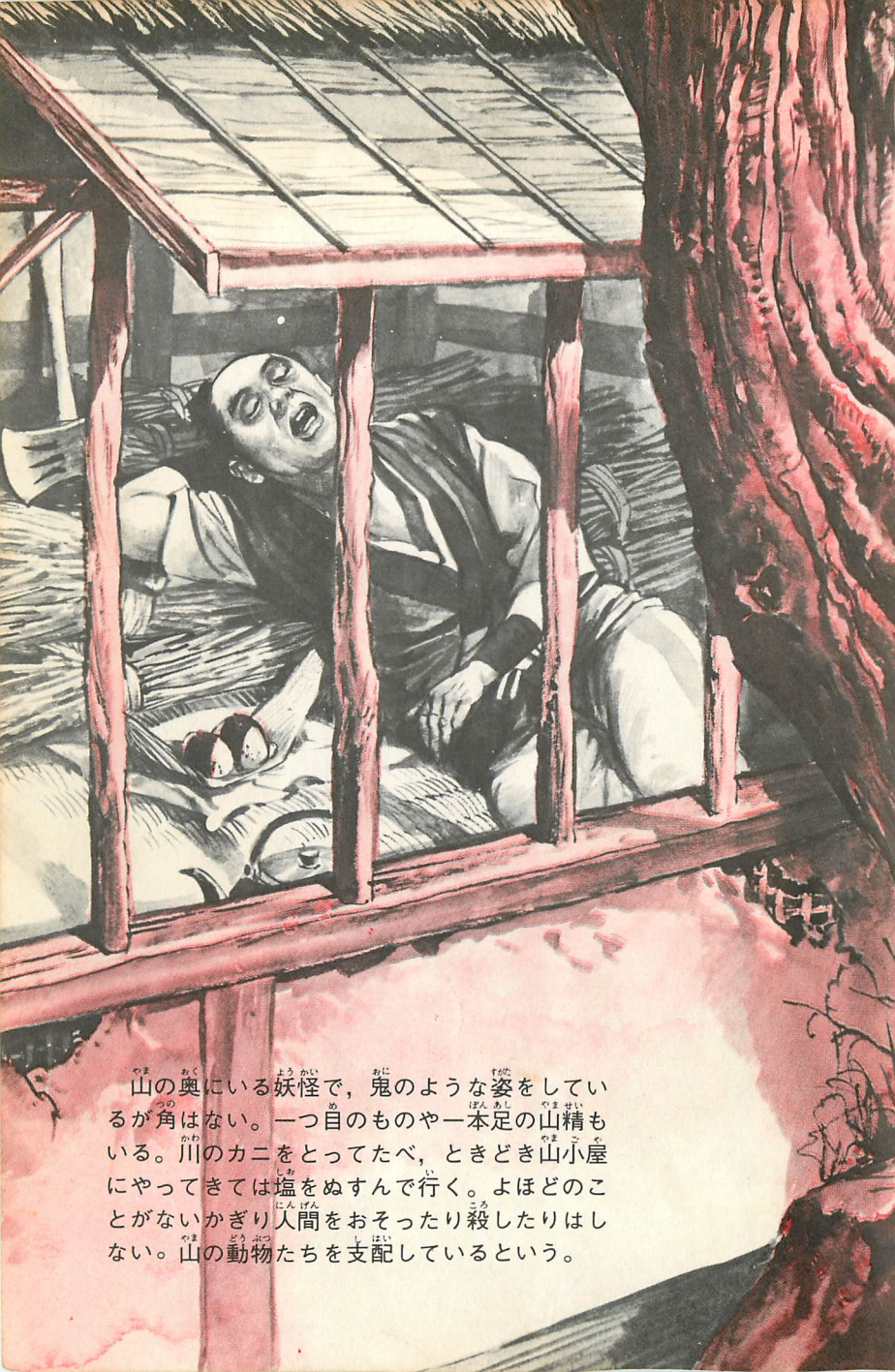
じっさい、ぬえなどは昔の記録にも奇怪な鳥であると書かれているので、どうも怪獣ではなかったと考えられる。

また、目が一つしかなかったり、手足がそろっていなかったりして生まれた赤んぼうや、象皮病というみにくいひふ病にかかった人間をみて、これは妖怪のしわざにちがいないと思われたものもあったにちがいない。

しかし、多くの妖怪はどのようにして生まれたのか、科学的にとけないナゾやふしぎな現象もあるので、これからの研究が待たれる。

2 人間の妖怪*

人間の姿をした妖怪には、人間から変化したものと、魔力をもつほかの妖怪が人間に姿をかえているものとがある。
さらに、山の奥に住むという妖精やヘビのたたりなどと人間がむすびついて生まれた妖怪もある。それぞれ、どんな魔力をもっているかを見てみよう。

▶この世にうらみを残して死んだ人間は、だれでも幽霊になるというが……。

やま　せい
山精
ISHi

山の奥にいる妖怪で，鬼のような姿をしているが角はない。一つ目のものや一本足の山精もいる。川のカニをとってたべ，ときどき山小屋にやってきては塩をぬすんで行く。よほどのことがないかぎり人間をおそったり殺したりはしない。山の動物たちを支配しているという。

おしろい婆さん

おしろい婆さんは，12月になって月がきれいに出る夜，やぶれがさをかぶり，つえをつきながらあらわれる。女の人が，お化粧するときにつけるおしろいの神さまの使いなので，においがぷんぷんして，すぐにわかる。男の子が，この妖怪にあうと，あっというまに女の子のように顔におしろいをつけられてしまうという。

＊山姥
＊燈台鬼

長野県や静岡県の山奥に住んでいて、ときどき人里におりてくるという。白髪でするどい目つきをしているが、ほんとうは心のやさしい妖怪で、とくに子供が好きだ。有名な足柄山の金太郎は、この山姥にきびしくやさしく育てられて、とても強いごうけつになった。

奈良時代のこと。日本にまねかれてやってきた中国の役人が、はら黒い人にオシになる毒薬をのませられてしまった。

「はるか海をこえてやってきたのに、なんというひどいことをする人だ！」

と中国の役人は怒って、はっしと相手をにらみつけたまま、その場から、一歩も動かなかったという。ところが、それをおもしろがって全身に色をべたべたぬり頭の上に一本のろうそくをおいたので、その中国人はついに復しゅうのために燈台鬼となり、近よる人をたちまちにしてオシにしたという。

鬼ばばあ

「うひっひひひ……おいしそうな娘じゃ」

若い娘をさかさづりにした鬼ばばあは、舌なめずりをしながら、ゴシゴシと包丁をといだ。娘を切りきざんで、その肉をナベでにて、たべようというのだ。

この恐ろしい鬼ばばあは、いまから千年ほどまえ、奥州（福島県）の安達が原に住んでいて、夜中に、道にまよった旅人や娘を殺してたべ、とくに赤んぼうの生きぎもを好んでたべたという。この生きぎもや人間の肉をたべたため、鬼ばばあは数百年間も長生きしていたが、お坊さんにお経の呪文をとなえられて姿を消したという。

火ふき婆さん

火ふき婆さんの姿を見た人は、その夜はねむらないで火もとに注意しなければならない。この妖怪は、口から火を吹いて火事をだしては、よろこんでいるからだ。ちょっと見ると白髪の老婆に見えるが、そのくちびるがまっ赤なので、すぐわかる。

＊吹っ消し婆

風もないのに、たまたま火が消えることがある。この妖怪は、ちょうちんの火があかあかともっているときは、さっぱり姿が見え

＊油赤子

江戸時代のこと。大津地方（滋賀県大津市）によくあらわれた妖怪。〈油なめ〉ともいわれ、油をぬすんで行くので、あんどん

ず、近よってきてもわからない。
ふっと、音もなくキリのような風をおくって、どんな火でも消してしまうのだ。そしてあたりがまっくらになると、はじめて老婆の姿を見せてこういうのだ。
「あたしゃ、光がきらいな吹っ消し婆だよ」

ふつけし婆々

の油は夜ねるまえに、油つぼにしまっておくようにといわれた。
油赤子は、夜おそく、どこからか小さな火の玉となって飛んでくるが、あんどんの油をなめると赤んぼうの姿になり、油をなめてしまうと火の玉になって飛んで行く。

座敷わらし

座敷わらしは、東北地方にいる妖怪で旧家の天井裏や古い土蔵の中にひっそりと住んでいる。五〜六歳の子供の姿をしていて、小さな子供たちと外であそんでいることがある。子供には姿が見えても大人には姿の見えないふしぎな妖怪だ。

そして、この妖怪は家の運命と関係があって、住みついている間は家の商売もさかえ、火事があればいつのまにか座敷わらしが荷物を運んでくれるが、姿を消すとその家に不幸がおこるという。

ISHI

がんぎ小僧

美しくすみきった池や川の流れが，急に黒くよどんで，死の沼のようになることがある。それはがんぎ小僧が池や川にやってきて住みつき，魚をすべてたべつくし，水草までかれさせてしまうので，死の沼になるのだといわれている。川の流れがよどんで，水が黒っぽくなるのも，がんぎ小僧が姿を見せないようにするため，沼や川の底のどろをかきまわして，にごらせるのだという。

＊雨ふり小僧

にわかに黒い雲がたれこめはじめる夕方から夜にかけて、シトシトという足音がきこえると、雨ふり小僧がやってくるという。

＊骨・女

江戸時代のこと、夜の十二時をすぎると「カラーン、コローン、カラーン………」とゲタの音がする。

この妖怪は、雨の神の子分で、からだじゅうにじめじめと水気をふくみ、顔には青カビがはえている。子供のように背が小さいのでうっかり安心して近づくと、
「おや、あんたは水気がたりないぞ！」
と大人のような顔で、ぶきみに話しかけてくる。そして、通りかかった人は、着物をびしょぬれにされて青カビをうつされるという。

「こんな夜おそく、だれだろう？」
窓をあけてみると、外のくらやみに美しい着物をきた若い娘が立っている。そしてボタンの花かざりのついたちょうちんを持っている姿は、ひどくさびしそうだ。
そこで、家の中へよびよせようと近づくや、若い娘は急にふりかえってケタケタ笑うのだ。若い娘と見えたのは、なんと全身ガイコツの骨女で、人間にしがみついたら死ぬまではなれない妖怪だったのだ。

蛇骨ばばあ

その昔、東北地方の山奥に蛇五右衛門という人がいた。昼の間はねむっていて、夜になるとどこへともなく姿を消したが、じつはなん万匹と集まるヘビの巣の親玉が人間に化けたものだった。そして、この蛇五右衛門の妻が、もっと恐ろしい蛇骨ばばあであった。右手に青い大蛇、左手に赤い大蛇をからませた蛇骨ばばあは、この二匹の大蛇をあやつって人間を一瞬に殺してしまったという。青い大蛇はすべてのものをこおらす青い炎、赤い大蛇はどんなものでも焼いてしまう赤い炎をはいたといわれている。

のっぺらぼう

のっぺらぼうは、顔のない妖怪だ。人間に害をくわえないが、ひどくびっくりさせる。

しかし、この妖怪には二種類あって、右の写真のものは手足がついていても首がなく、からだ全体がモチのようにねっとりとしている。また、上の写真のように、顔全体に目や口や鼻がないものもある。これらは、たぶん目鼻のうすい奇形の人をモデルとして、つく

りあげられた妖怪ではないかとも考えられている。

＊歯黒べったり

古い神社の森の中やさびしい墓地に、ひっそりとかくれているという歯黒べったりは、女の姿をしたのっぺらぼうとよくにている。

人間が近づくと、なにをいいたいのか、大きな口をあけて黒い歯をみせ、カチカチカチと歯をならすという。とてもみにくい顔をした若い娘が、だれもお嫁めにもらってくれないので自殺してしまった。そのうらみが亡霊になって、墓場や神社にさまよいでるのだという。

▶この妖怪がでたときは、「お嫁にもらいますよ」というと姿を消すという。

ろくろ首
豪
ISHi

ろくろ首は、ゴムのように長くのびてだんだん首が細くなり、数十メートルにもなる。夜中にしのびこんで、ねむっている人間をたべてしまうという。

また、ろくろ首は〈ぬけ首〉ともいって、胴体から首だけがぬけて空中を飛びまわることもある。この場合は、ぬけ首の胴体はねむっていて、首のほうは虫をたべるために外へ出て行くからだ。

しかし、首が長い間、胴体からはなれていると死んでしまうので、胴体のほうをかくしておくと、首はくるったように胴体をさがしつづけたまま死ぬという。

ぶめ

▶鎌倉時代のこと。源頼光のけらいだった卜部季武という武士が、うぶめがでるという川へ、どきょうだめしに行ったが、うぶめからあずかった赤んぼうは、三枚の葉っぱになったという。

うぶめの正体は？

うぶめは、〈産女〉とも〈産婦鳥〉とも書いて二種類あるようだ。

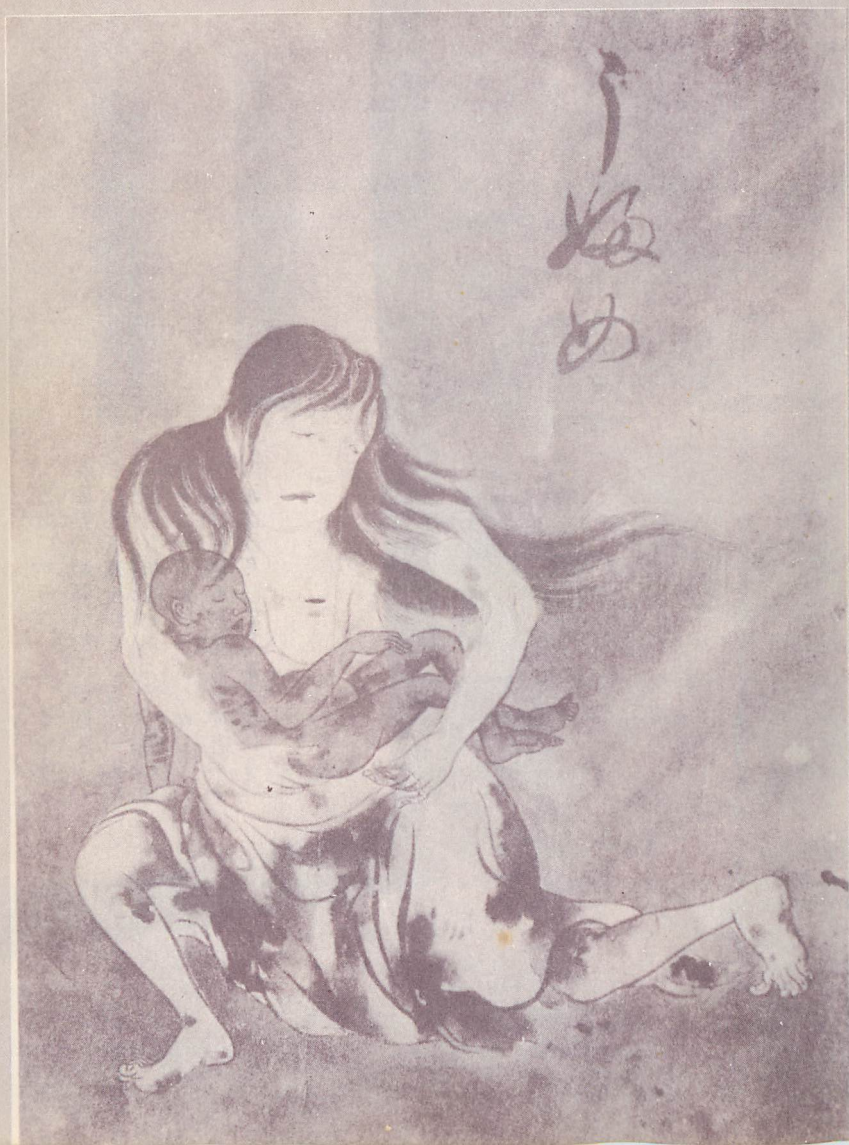
〈産女〉のほうは、野原や川ばたなどでだれにも見とられずに赤ちゃんをうんで死んでしまった母親の亡霊だという。

また〈産婦鳥〉のほうは、山道の深い谷間の道を旅していた女の人が、あやまって谷底に落ちて死んでしまったが、そのときおなかの中にいた赤ちゃんも死んでしまったので、その亡霊がワシのような鳥となって近くの村の赤ちゃんをさらったり、赤ちゃんを口バシでつついたりするという。

そして、うぶめは人間と出あうと、

「この赤ちゃんをだいて……だいたら、こっちへかへして……」

となん度もたのむ。そのとおりにしないと寒気がして死んでしまうという。

▼冷たくなった赤んぼうをかかえて出る死霊の妖怪・うぶめ。

長壁姫

古城にすみついている妖怪で兵庫県の姫路城の天守閣にもいたことが知られている。一年に一回だけ城主とあって、城の運命をつげるという。しかし、この妖怪が城から姿をけすと、その城はほろびてしまうという。

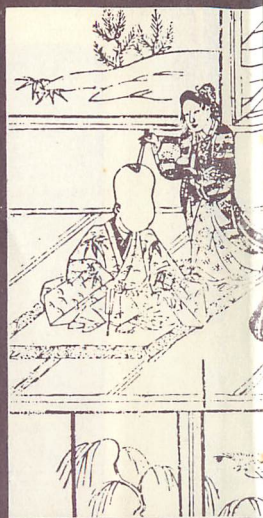
一つ目小僧

◀いまでも、ひとりの人間に頭が二つあるシャム双生児などがいるが、昔も、左の絵のように頭の上に口だけある人間や、一つ目の人間などがいたのだろう。

◀一つ目小僧は、たぬきが化けたものだともいわれているが……。

一つ目小僧の正体は？

古い寺やあれはてた小屋などをたずねると、小さな坊主があらわれて、「お客さん、お茶をどうぞ」という。ひょいと見ると、目玉がやけに大きくてまるい一つ目の妖怪が、べろりと舌をだす。おどろいて、お茶をぐっとのみほすと、それが馬の小便だったりする。

◀一つ目小僧がお茶をはこんでくるところ。

そこで、昔の人たちは、こんないたずらをするのは、たぬきが一つ目小僧に化けたのだろうと考えたらしい。

ところが、いまでも各地方の山ぶかい村などでは、一つ目小僧の神さまが信じられている。これは、ある神さまがころんだときに、竹ざさで片目をついてしまったので一つ目小僧になったという伝説である。

また、いまも昔も生まれながらの奇形児ということが、ずいぶんと多いようだ。じっさい、いまでも一つ目の気のどくな赤ちゃんが生まれることがあるという。

昔の人たちは、そういう一つ目の子供をものめずらしい子として見世物小屋に売りわたしたり、いやらしく恐ろしい子として寺にあずけたり、だれもいない小屋にその子をすてたりしたという。

もし、わたしたちが一つ目の人間の世界に生まれたら、どうなるだろうか？

*野寺坊

油すまし

とても小さなからだで，長いつえをもっている。大阪ことばで，ぺらぺらとしゃべり，たいへん頭がよい。くるくるっと油すましのようにまわると，よいチエがでるという。

野寺坊は、だれも住めそうもない古寺にあらわれる。その昔寺のお坊さんが死ぬと、だれもあとつぎをする坊さんもなく、寺がすっかりさびれてしまったので、そのうらみが野寺坊になったのだという。この妖怪がでたときは、お経をとなえると消えるが、お経をとなえないと頭をまる坊主にされたあげく、目玉をくりぬかれるという。

◀左の絵は、江戸時代の妖怪の手本にえがかれている野寺坊。

青坊主

とても身動きがすばしこく、頭もよく、いろいろな魔術を使うので、忍者のような妖怪だ。妖怪どうしで戦ってもベスト・テンにはいる強さである。変身の術や千里を一秒で走る術にすぐれ、とくにワナをしかけるのは超一流だ。

＊ももんじい

この妖怪は、ももんがあともよばれているが、ほんとうはまだ、だれひとりとして姿を見たことがないという正体のわからない妖怪

＊青女房

平安時代のこと。みかどが住んでいる宮殿によくあらわれたという。まるで死人のような青い顔をしてマユが黒ぐろと太く、

だ。ふつうは、やせほそった老人で、全身に毛がはえているといわれているが、これはそのような姿を空想しただけのことだ。
　くらくて、さびしいところにはどこにでも住んでいて、この妖怪にとりつかれたら、どんな人でも重い病気になるという。

「家へ帰りたくないかい……」
と、みかどにつかえる女官に、ささやきかけた。しかし、女官が首を横にふると、あっというまに顔をまっくろにぬられてしまったり、朝おきてみると顔にバカという文字がかいてあったりしたという。
　この妖怪は、女官になりたくなかった女の人の、うらみが亡霊になったのだといわれている。

雪女

雪のふる日に，すきとおるような白い着物姿の美しい雪女が，いつのまにか子供をつれさって行くという。そして，子供をだいた雪女は，通りすがりの大人に「この子をだいてください」と悲しい声でよびかけるという。
ところが，その子供は雪よりも冷たく，だんだん重くなり，大人は雪の下にうずまって，こごえ死んでしまうのだ。雪女というのは，雪の精の化身なのだろうか。

▼江戸時代の人たちが，とつぜんあらわれた人魂におどろいている。

＊人魂と鬼火の科学

人魂と幽霊とのちがいは、幽霊がこの世の人にうらみごとをのべるためにあらわれるのに、人魂は人間になんの害もあたえないことだ。しかし、どうして雨のふる夜に多く見られるのだろうか。

　これには死体の骨にふくまれるリンが、雨にあたってもえるという説やガス体がもえるという説がある。

　また、**鬼火**は昔の人たちがよくいう戦場火とか草げん火などと同じものらしく、人間や牛や馬などの死体の血が、もえておこるという。たしかに、血液の中にもリン分がふくまれているが、その量もわずかで、しかも、よほどの高温でないとリンは自然に発火しないものだ。

　ところが、警察の犯罪捜査でよく使うルミノールという薬品は、古くなった血液ほど、ちょっとぬっただけで青白く光る。すると死体の骨やそれにこびりついた血が地面にはんしょくする特別なバクテリアや土の中にあるかもしれないルミノール成分とむすびついて発光するとも考えられる。

　また、**狐火**はキツネが古い骨に息をふきかけて光らせるといわれているが、これは発光バクテリアの働きによるのだろう。墓場などに多い発光バクテリアは、しめり気があるとよく光るからだ。

3

人獣の妖怪*

半分は人間で半分は動物の姿をしたものが半人半獣の妖怪といわれている。たとえば、牛のような二本の角をもった人間が鬼であり、ヘビのようなウロコをした女性は、蛇女というわけである。その多くは、人間が動物の血をすったり、動物の恐ろしい霊が人間にのりうつったりして、人獣の妖怪となったといわれている。

▲渡辺綱が羅生門の鬼とたたかう図。

女郎ぐも
ISHI

その
モが女の生き血をすす
ると，女は
ちクモの姿となり，こんどは男の生
き血をもとめてさまよった。昼はすばらしく美しい女の
姿をしていて，夜になると口から青いけむりをひゅうと
はいた。青いけむりは，無数の小さなクモとなって人間
にからみつき，女郎ぐもは生き血をちゅうちゅうすする
のだ。おそわれた人間は，生きたしかばねと化すとい

一角人

頭の上に一本はえた角は、鉄のとびらをもつきやぶるという強力なもので、しかも、この角は百キロも遠いもの音や人間の話し声をきくことができる超能力をはっきする。しかし、太陽の光にあたると角はとけてしまう。

＊清姫

いまから約千二百年ほどまえのこと。東北地方から和歌山県の熊野にやってきた安珍というお坊さんが、美しい娘〝清姫〟と結婚の約

＊うろこ人

五百年ほど昔のこと。いまの徳島県の海岸に住んでいた藤太郎という漁師が、ある日、きみょうな魚を一ぴきつかまえた。

束をした。しかし、いつまで待っても安珍は結婚をしてくれない。それどころか、安珍はこっそりと逃げだした。だまされたと知った清姫は、いかりにもえてどこまでも安珍をおいかけた。うらみの強くこもった清姫は、とうとうヘビになり竜になってしまった。

安珍は恐ろしくなって大きなカネの中に身をかくしたが、竜と化した清姫は、口から火をはいて安珍をカネごととかしたという。

大きさが五〇センチほどで、人間のような形をした二本の手が、にょっきりとはえているのだ。そして、口をパクパクさせながら、

「どうか、海へにがしてください」

と人間のことばでしゃべったという。だが藤太郎は、めずらしい魚だとばかり見世ものにしたところ、すぐに死んでしまった。

ところが、その夜のこと、藤太郎の全身に魚のウロコがはえてきたという。

羅生門の鬼

いまから1000年ほどまえのこと。京都の東寺の近くに羅生門があった。ある夜，この門のあたりを通りかかった渡辺綱という武士は，美しい娘によびかけられて近よると，娘はたちまち鬼と化しておそいかかった。渡辺綱は，ふりはらった刀で鬼の腕を切りとったが，7日後に鬼は綱のおばに化けて腕をとりもどしたという。

ISHI

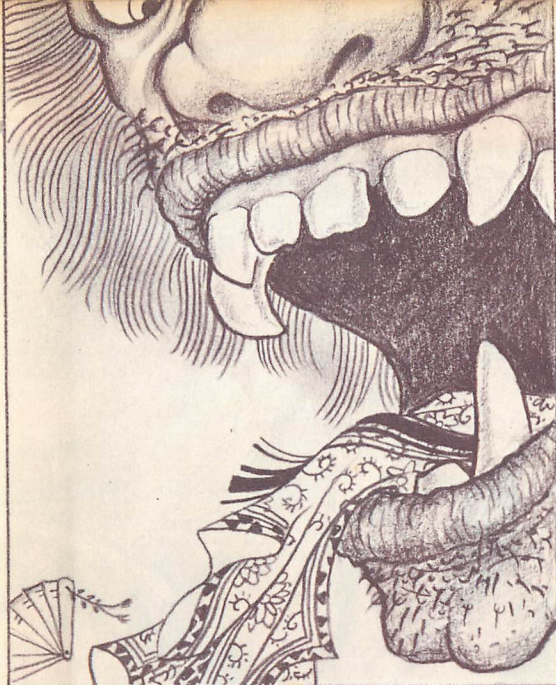
般若

般若は、平安時代や鎌倉時代に、京都ふきんによくあらわれた。もともとは、インドのほうからやってきた妖怪で鬼の先祖ともいわれている。うらみをもつ死人の魂が化けたものだが、般若心経というお経をとなえるとにげて行くという。

＊鬼一口

鬼のなかまのうちでも、どれくらい大きいか、けんとうもつかないほど大きなやつだ。だれひとりとして、この鬼の全身を見た人

＊髪鬼

江戸時代のこと。とてもみにくい娘が、その顔をかくしたいばかりに髪の毛を長くのばし、なんとか人目にふれないようにし

はなく、大きな口をぱっくりとひらいたところしか見えないという。
とくに、夜おそく一じんの風とともに空の一角からあらわれ、若くて美しい娘をねらって、たった一口でたべてしまうところから、この名まえがついた。

た。しかし、美しい娘をみると、むしょうにハラがたった。あまりにうらみがつのったためか、とうとう髪の毛がゴワゴワとかたくなり、ハサミで切ろうとしても切れなくなった。そして、髪の毛が鬼の角のように、にょっとつき立ったという。

ぬれ女

江戸時代のこと，北陸地方や九州地方の川や海べにさかんにあらわれた妖怪・ぬれ女は長さ300メートルもの蛇身で，見つけられたが最期，にげられないという。

▶北陸地方にあらわれたぬれ女は、川にすんでいて、魚つりにきた人たちをおそったという。

血をすうぬれ女

江戸時代（一八一九年）の夏のこと。
いまの新潟県の信濃川上流に、ひのき森という村があった。村の若者四人が魚つりに行き、川の上流にあるツガ森というさびしいところに出た。そこは、血を吸うダニの一種ツツガ虫が無数にすみ、なん百というヘビが大きな巣をつくっているというので、だれも近よらないところだ。

しかし、このツガ森の中をとおる川に糸をたれると、とりきれないほど魚がつれるではないか。四人の若者が、すっかりむちゅうになっていると、ふいに川がざわざわとさわいで、黒い髪のようなものが音もなくうずまいている……。

とつぜん、すうっと水面に女の顔があらわれた。水にぬれた女の顔が、あまりに美しいので、若者たちは息をのんだきり、ぼ

●山陰地方の島根県や九州地方にあらわれたぬれ女は，海にすんでいて海岸にやってきた。漁師の若い男がとくにねらわれたというが，海ヘビの化身ではないかともいわれている。

うぜんと立ちつくした。
思わず、ひきこまれてじっと見つめていると、女の口からまっ赤な長い舌が、ひゅうとのびてきた。
「うわっ!!ぬれ女だ。にげろ!」
若者たちは、いちもくさんに走りだしたが、ぬれ女は耳までさけた大きな口をひらいて追いかけてくる。長さ三百メートルもある青い蛇身をするするとのばして、あっというまに若者たちをまきこんでしまったのだ。そして、ぬれ女はひとりひとりの若者の生き血をすすった。
若者たちは、まるでヘビのぬけがらのように骨と皮ばかりになって、地面にどさりと投げおとされたという。
この恐ろしいぬれ女は、なん百人もの人間の血をすいつづけて、だんだん大きくなり、ますます魔力をたくわえて、このような姿となったのだといわれている。

人魚

▼人魚は、ヒバリやシカのような声で鳴き ウロコは金色にかがやいていて、とてもよいかおりがするという。

◀人魚の肉をたべると歳をとらないという。（福井県小浜市の空印寺にある絵）

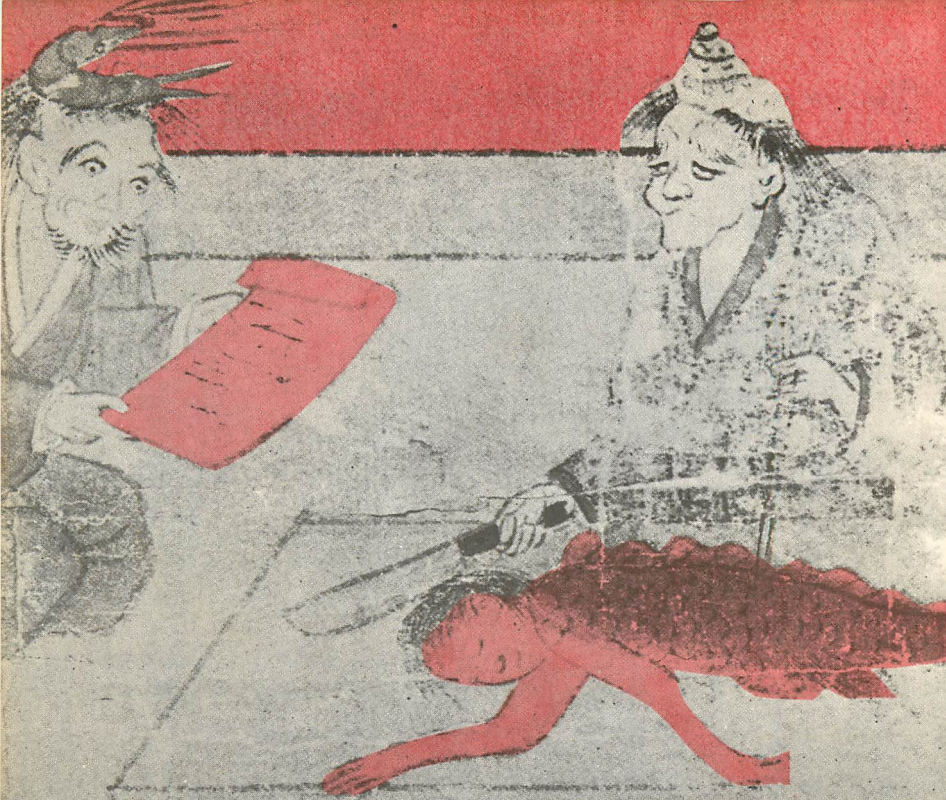
人魚の正体は？

四八四年――いまから千五百年ほどまえのこと。若狭の国（いまの福井県小浜市）の海辺に高橋権太夫という金持ちがいた。

あるとき、権太夫は海へでると、ひとりの美しい女にまねかれて、見しらぬ島につれて行かれた。そして帰るとき、見たこともない人魚を一ぴきもらったのだ。

「この人魚の肉は、舌がとろけるほどおいしく、たべるとけっして歳をとりません」といわれたのだが、どうも気持ちが悪くてたべる気がしない。

ところが、権太夫の娘が人魚の肉をこっそりとたべてしまったのだ。まるで夢見ごこちのように、おいしい人魚の肉だった。

一年、二年……権太夫の娘は、なん年たっても歳をとらず若くて美しい。やはり人魚の肉は、不老長寿のくすりだったのだ。

しかし、娘は七十歳、八十歳となっても若いままだったので、自分でも恐ろしくなってきた。とうとう百二十歳になったとき、頭髪をそって尼さんになり、それから八百歳になるまで生きていたという。

これは、人魚についてのいちばん古い記録であるが江戸時代までに約五十以上もの記録が、おもに日本海岸一帯に見られる。

いったい、この人魚の正体はなにか。アザラシやアシカなどを見まちがえたという考えもあるが、南洋や日本海の南の海にいるジュゴンではないかともいわれている。

このジュゴンのメスは、胸に二つのおちちがあり、ヒレで自分の子どもをだいて、頭を海面からだしているからだという。

▲このジュゴンが人魚の正体か？

▼江戸時代の幽霊画の名人《円山応挙》は、かいている絵が幽霊になったという。

＊妖怪の超能力と弱点

妖怪の特徴をよく見てみると、いろいろな超能力をもっていることがわかる。まるで、SFマンガや小説にでてくるスーパーマンのようである。

①忍術のように姿をあらわしたかと思うと、急に消えたり、また小さなすき間や壁も自由にとおりぬけることができる。

②いろいろな姿に変身することができ、人間にとりついて、その人の顔に変わることもある。

③一瞬のうちに、空を飛ぶテレポーションもできる。

④とても頭がよく、人間が考えていることを見ぬくことができる。

⑤ものすごい力を持つ。

⑥身動きが、すばしこい。

⑦ふしぎな魔力を持っていて、人間を見えない力でしばったり、人間を病気にしたり気を狂わせたりすることができる。

⑧雨を降らして雷をよんだり、風を巻きおこしたり鬼火をよんだりして、自然の力をあやつる。

⑨刀やピストルで傷つけても、なかなか死なない。一度死んでも、また生きかえったりする。

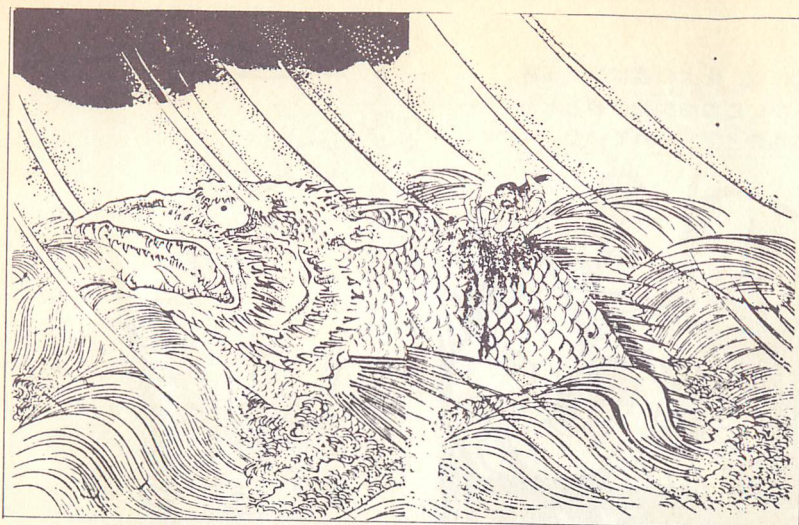
しかし、弱点もあって妖怪をたいじするには、念仏をとなえたり「南無阿彌陀仏」などと書いた護符をはったりしておくとよい。また妖怪は夜に強いけれど、日光にあたると魔力を失なってしまう。

4 妖怪出現の記録*

鬼や幽霊などの妖怪は、いったい、いつのころからあらわれるようになったのだろうか。約一七〇〇年以上まえからの日本の歴史をたどり、多くの古い歴史書や説話、各地方にのこる文献から妖怪変化の出現を見てみよう。

▼足柄山の《金太郎》は，いろいろな妖怪をたいじしたという。

▲須佐之男命が出雲の国で八頭の大蛇をたいじ。

時代	年代	妖怪出現の記録
古代（神話の時代で1700年以上まえ）	神代①	◉イザナミノミコトという人は、黄泉国（地獄の国）へ自由に行ったり来たりできたというが、そこで地獄の亡者や鬼、幽霊などに追いかけられ逃げてきた。
	神代②	◉スサノオノミコトという勇者が、出雲の国（いまの島根県ふきん）で、八つの頭をもった大蛇に八つのツボにはいった酒をのませ、よっぱらったところをみはからい、みごと首をはねてたいじした。
	神代③	◉トヨタマ姫という人が、竜に変身した。
	神代④	◉ヤマトタケルノミコトという勇者は、クジラほどもある怪魚を讃岐（いまの香川県）の海で、たったひとりでたいじした。
	三七七年	◉飛騨の国（いまの岐阜県北部）に、奇

▲日本武尊は，讃岐の海でクジラほどの悪魚をたいじ。

大和時代（西歴300年から710年まで）

怪な人獣があらわれた。頭が二つで四本の手と四つの足。その四本の手で弓矢をつかい剣をふるい大あばれした。

三七九年 ⊙備中の国（岡山県西北部）の川に大みずちがあらわれ、ものすごい毒液で多くの人が死んだ。

四八四年 ⊙八百比九尼というあまさんが人魚をたべた。（一一〇ページを見よ）

五八四年 ⊙このころより天狗があらわれる。

五九八年 ⊙奈良県明日香村にある元興寺に、ものをいうふしぎな木がはえ、これを切ろうとした人は次つぎと死んだ。

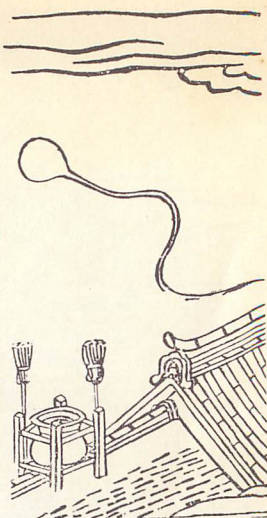
六一九年 ⊙聖徳太子に人魚が献上された。

六二七年 ⊙九州の海岸に中国からわたってきた河童が、大群上陸。九千匹にふえる。

六六〇年 ⊙このころ、石見山（島根県ふきん）という山にツツガ虫が大発生。近くの村の人たちの生血をすって恐れられた。

七〇七年 ⊙全国に疫病神があばれて、多くの人が死に、三つの面をもつ鬼が登場。

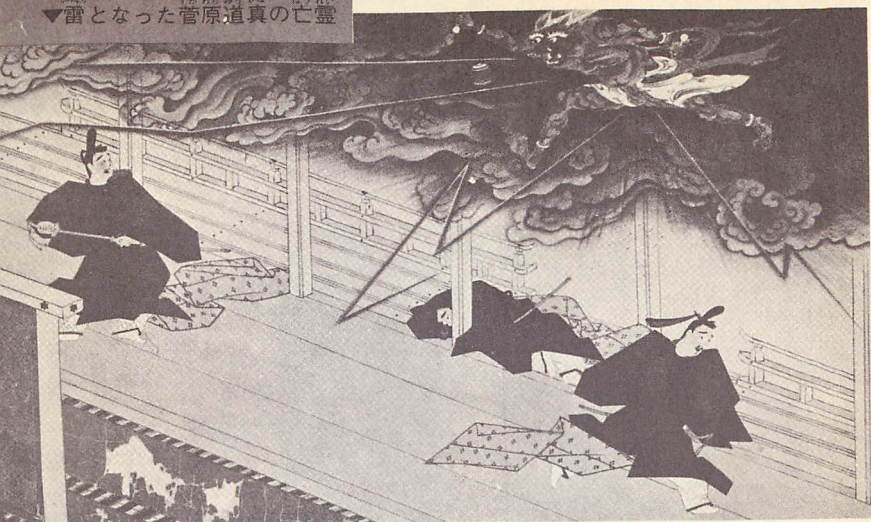
▼奈良時代には，死人の霊はまだ幽霊にならず，がいこつや動物の姿となって現われるものと信じられていた。

▶人間が死ぬと人魂になって空中を飛んで行くと考えられていた。

時代	奈良時代（710年から794年まで）
年代	妖怪出現の記録
七二九年	◉いまの奈良県あたりに鬼が出現。地主の娘が頭と手をのこして食べられてしまう。
七四二年	◉東北地方に赤い雪がふる。
七五九年	◉「万葉集」に、人魂の記録が書かれた。死んだ恋人にあいたいけれど、青くもえる恋人の人魂にあえるのは、雨のふる夜だけなので、とても待ちどおしい……という和歌である。
七七〇年	◉京都の西大寺の土台石に使おうとした石が、ぶきみに動いて鳴りだした。これをくだいたところ、石のたたりで多くの人がふしぎな病気にかかった。
七七六年	◉京都で、この年の九月二十日から二十数日間、毎夜石の雨がふりつづいた。
七七八年	◉広島県北部の村に、髑髏の妖怪があらわれる。

◀この時代は、仏教がだんだんひろがると、人間は死んで人魂となり、地獄へ行くものと考えられるようになった。そこで、地獄には、三つ目の鬼がいて、人間が生きていたころの罪の重さによって、罰を与えると信じられていたのである。

平安時代（794年から1185年まで）

年	できごと
七八四年	◎大阪の天王寺に、二～三万匹ものガマがいっせいに集まって二つにわかれ、ガマの大合戦が行なわれた。
八一九年	◎京都に白い竜があらわれ、ものすごい暴風をおこして人家の屋根を飛ばす。
八二五年	◎琵琶湖に人魚が姿をあらわす。
八三四年	◎京都で数百の天狗が空を飛ぶ。
八四五年	◎山城の国（滋賀県大津市のふきん）に、ハチより大きな蝱虫という昆虫が大群をなして集まる。全体がまっ赤で首のところが黒い虫で、牛や馬だけをねらって殺し、たちまち骨だけをのこした。
八六〇年	◎京都の愛宕山に大天狗があらわれる。
八七五年	◎京都でぬえの合戦があった
八八七年	◎京都に、毎夜人食い鬼がでる。
八八九年	◎そのころの天皇のまえに、背の高さ一メートルの小さな老人が、とつぜんあらわれた。ひふがコケのような姿をしていたが、正体は水の妖精だった。

▼雷となった菅原道真の亡霊

時代	平安時代（794年から1185年まで）
年代	妖怪出現の記録
九〇〇年	⊙和歌山県の熊野神社へ行くとちゅう安珍という僧侶は、竜と化した清姫に殺された。
九〇八年	⊙菅原道真の亡霊が雷と化して宮中に落ち、藤原家の貴族たちを次つぎとのろい殺した。
九五五年	⊙京都の羅生門にはじめて鬼がでる。
九五八年	⊙京都に人を食う女鬼があらわれる。
一〇七七年	⊙岡山県のあたりに、らいごう出現。
一一四四年	⊙滋賀県大津に二面女がでた。顔の大きさが三〇センチもあり、二つの目とあごまである鼻、口はあごの下にあった。また頭のうしろにもうひとつの鼻と口があり、一つの目がついていた。
一一五〇年	⊙岐阜県の山中に人を殺す猫狗がでる。
一一五三年	⊙源頼政が夜ごとにあらわれるぬえをたいじした。

▶右大臣菅原道真は、藤原家の人たちのだましうちで死ぬと、そのふくしゅうをとげるため、雷となって左大臣藤原時平など五人をのろい殺した。

◀「一枚…二枚…」と毎晩、皿の数をかぞえながらあらわれる皿屋敷のお菊の幽霊。井戸にさかさづりにして突きおとした奥方などに、うらみをのべるためにお菊は幽霊になったという。

年	できごと
一一七〇年	⊙平清盛が神戸のふきんでなん百という髑髏におそわれる。
一一八〇年	⊙京都に、夜ごと百鬼のむれがでた。

鎌倉時代（1185年から1333年まで）

年	できごと
一一八五年	⊙このころ東北地方(秋田県・青森県)の日本海にさかんに人魚があらわれる。
一一九〇年	⊙関東地方は大雨と雷鳴がとどろき、山々がぶきみにふるえ竜があらわれた。
一二三一年	⊙奈良地方に妖獣がでる。大きさは犬ほどだが、目は猫のように青く光って、夜になると人間を食い殺した。
一二四〇年	⊙京都の清水寺に天狗がでる。
一二四七年	⊙青森県の海に人魚がたびたび姿を見せる。
一二五九年	⊙この年、全国に疫病が大流行し、死体を食う女鬼や餓鬼がむれをなした。
一二九〇年	⊙播磨の国（いまの兵庫県）の女中お菊が、家宝の南蛮皿十枚のうち一枚を割る。これが、番町皿屋敷の怪談である。

▶室町時代になると、幽霊の存在が信じられるようになり、女の幽霊が多くなった。

時代	室町時代（1333年から1390年まで）
年代	妖怪出現の記録
一三三四年	◎出雲の国（島根県）に天馬あらわれ、一日に千里を走る。 ◎京都の上空に怪鳥が飛ぶ。頭が人間の首、胴体には蛇のようなウロコがあって、羽の長さは四メートル八〇もあった。
一三五七年	◎伊勢（三重県）の海に人魚がでる。
一三六一年	◎大阪の海岸に大きさ六メートルほどの竜が二匹あらわれた。この竜は、大阪の天王寺までやってきて金堂に巻きついたがものすごい雷光を発したかと思うと、一瞬にして金堂を吹きとばした。
一三六七年	◎山口県の瀬戸内海よりの海上に、ものすごい海蛇がでて、船をなん隻も沈めて大あばれした。
一四〇八年	◎このときの将軍足利義持の館の庭に、

▶山の奥には仙人がいるといわれていたがこれは奈良県の山中にいた久米仙人の絵。

◀戦国時代はとくに武士の戦争が長くつづいたためもあって、武士のうらみをのこした魂が戦場に鬼火となってもえたという。

戦国時代（1390年から1603年まで。桃山時代をふくむ）

ガマが数万匹も集まって大合戦。

一四六五年
◎京都の愛宕山の太郎坊という大天狗のところに、なん百という天狗が一族のからす天狗をつれてきて大集会。

一四七七年
◎東北地方に赤い雪が三センチつもる。

一五三六年
◎将軍足利義晴のけらい畠山義忠が馬にのって行くと、空からまいおりた妖女が呪文をとなえ馬を一瞬にして殺す。

一五四六年
◎中国地方に人の血をすう赤犬がでる。

一五七九年
◎豊臣秀吉がたてた安土城にゾウのように大きい牛の妖怪がでた。刀で切りつけても血がでず、姿を消すという妖怪だった。

一五八五年
◎長野県の羽場村の川に河童があらわれ馬を川の底にひきずりこもうとした。

一五九一年
◎肥後の国（熊本県）の加藤清正のけらいが河童に殺された。そこで、清正は河童たいじを命令したが、河童のほうであやまったので、ことがおさまる。

一五九六年
◎桃山城の庭に芭蕉の精があらわれる。

▼愛知県岡崎市にでた有名な化けねこ。

▶江戸時代の初めごろは、たぬきやきつね、ねこなどが化けたという話が、とても多い。右の絵は、たぬきが大入道のろくろ首に化けてあらわれたもの。

江戸時代・初期（1600年代）

時代

年代	妖怪出現の記録
一六〇九年	◉徳川家康のすんでいた駿府城の庭に、全身が肉だんごのような姿をした小人の妖怪がでた。これを肉人と名づけた。
一六二四年	◉岡山県に、ものをいう黒犬があらわれ次つぎと予言をしてあるいた。
一六四〇年	◉大分県の日田村で河童がつかまった。
一六四一年	◉福島県にある若松城の家老・堀部主膳が城の主である化けがめにのろい殺された。
一六七四年	◉東京の渋谷ふきんにあった丹波守の屋敷に、怪猫がでた。この化け猫は次つぎと人間を殺し、有名な鍋島猫騒動となった。
一六八三年	◉越後の国（新潟県）の桑取谷という森の中で、ひひがつかまる。大きさ二メートル、牙の長さ二十四センチ、赤黒い毛の長さが十五センチもあった。

◀このころ、きつねの嫁入りといって、きつねが美しい女性に化けた話が、数多くあった。

◎奈良県の村に源五郎と名のる化けぎつねがでた。ふしぎなことに百姓の手伝いをして二人まえの働きをし、飛脚をたのむと、二十日間かかるところを七日間で往復したという。

一六九八年
◎越後の国に雷獣があらわれた。

江戸時代・中期（1700年代）

一七〇二年
◎千葉県勝浦の観音堂の下の地下から、大きさ三メートルもの大髑髏が二つでてきた。

一七一〇年
◎京都の上空に、くさくてたえられないようなにおいをはなった奇妙なジュコー虫の大群がおしよせる。
◎愛知県の吉田村に大入道があらわれ、これを見た人は高熱で死んだ。

一七一六年
◎神奈川県金沢村で河童のミイラ発見。

一七二六年
◎子供に化けたかわうそが徳島県にでる。

一七三四年
◎大阪の海上に海坊主があらわれる。

一七四五年
◎江戸の王子できつねの嫁入りがあった。

魍魎

邪魅

▶死体を食うという魍魎や邪魅は、いろいろな妖怪変化をつくりだす妖怪の代表だった。

妖怪出現の記録

時代	年代	妖怪出現の記録
江戸時代・中期（1700年代）	一七六二年	◎静岡県の金谷村で宮守の妖怪があらわれ、刀や槍でさしても死ななかった。
	一七六五年	◎京都の五条に火車があらわれ、その火で大やけどをおう人がでる。
	一七八一年	◎仙台の伊達家の庭で河童がつかまり、殺されて死体を塩づけにされる。
	一七八四年	◎鎌倉の建長寺の古だぬきが、僧侶に化けたまま全国をあんぎゃする。
	一七九一年	◎山梨県の切石村で、人間のことばをしゃべる馬が評判となった。
	一七九六年	◎栃木県の村に人食いねこがあらわれる。
	一八〇〇年	◎江戸の吉原で、俳句師の一音という人が、ろくろ首の女に出あった。
	一八一四年	◎このころ江戸の町をさまよう狂女があらわれ、二十年間すこしも歳をとらなかったという。

◀江戸時代の後期には、四谷怪談などの芝居がブームになり、ろくろ首や大入道などの見世物や、お化け屋敷がさかんになった。

江戸時代・後期（1800年代）

一八二二年

◎江戸の神明町に、八十年まえに天狗にさらわれて帰ってきたという万屋満右衛門が大きな話題になった。

◎鎌倉で、ガマが自分で地面に穴をほり、夜中になると人魂に化して空を飛ぶ。

一八三六年

◎名古屋の掘川橋で、かわうそが捕る。

一八三八年

◎江戸の麻布町にあった堀田屋敷に、犬よりも大きく尾が二つあるねこまたがあらわれた。

◎神奈川県の海岸に、鳳そう魚というふしぎな魚がみつかる。馬のような顔に黒い髪の毛がふさふさとはえ、目はガラス玉のように光った。胴体は金色のうろこをした魚で、二本の手がついていた。

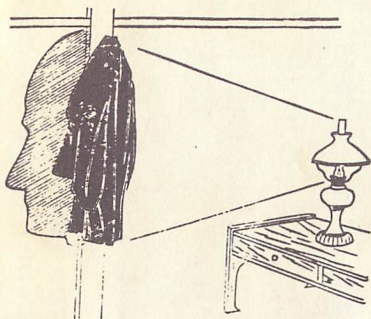
一八四一年

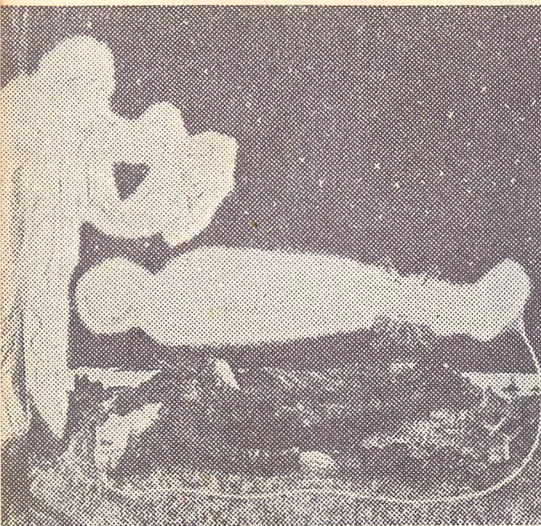
◎世なおし河童が江戸にあらわれ、徳川家の政治のやりかたをひなんした。

一八六五年

◎福島県の建福寺に、人間の生血をすう白い蛇がでて、多くの人が死んだ。

▼明治になると，妖怪や幽霊を科学的に正体をみとどけようという考えが広まった。井上円了博士は，幽霊は，下の図のように，目の錯覚によっておこるものと説明している。

◀幽霊の手をロウで型どったもの

明治・大正時代（1868年より1926年まで）

年代	妖怪出現の記録
一八七二年	⊙滋賀県の伊吹山に、五色の光につつまれた大入道があらわれた。
一八七四年	⊙東京の本郷三丁目の鈴木家で、かみきりが便所に出た。女中のぎんという人は、髪を切られてまるぼうずにされた。
一八七五年	⊙神戸に人間の内臓を食う宮守がでる。
一八七八年	⊙山形県の米沢で、身長五〇センチほどの全身が毛だらけ手足八本のクモ男がでた。
一八九〇年	⊙東京の三田にある宮地家では、夜になると火ばちやたんすなどの家具類が、ひとりでに空中にうかびあがり、ガタガタとさわがしい音をたてた。
一九〇七年	⊙東京の王子で、三つ目小僧がでた。
一九一三年	⊙群馬県前橋市に近い岩神村で、目がタテにつき、尾が二つある土竜を発見。
一九一五年	⊙京都の宮川町に、長さ七センチもある

◀しかし，現代では霊魂の正体はまだわからないとして，左の写真のように人間が死ぬと魂が死体からぬけていくという学説や心霊写真（下）の研究がすすめられている。

死人の顔がうつった心霊写真

	角がはえた角男がみつかる。
一九一七年	◎滋賀県の安土で、二メートルもの全身が金色という大蛇を捕えた。

昭和時代（1926年より）

一九二八年	◎長崎県の佐世保市に近い山口村に、全身がどのようにもまがるクラゲ人間を発見。
一九二九年	◎東京の小石川で、耳が六つもある三毛ねこが、笑って人間をばかにした。
一九三〇年	◎高知県の宿毛村の海岸で、頭が犬、顔は人間で尾が人魚という怪魚を発見。
一九三一年	◎千葉県市川町で、左の目が金色、右の目が銀色という奇怪な犬がみつかる。
一九四八年	◎鹿児島県の山中に、人間の顔ににた一つ目の妖怪さがりがあらわれた。
一九五二年	◎青森県の八甲田山中に狼男がでる。
一九七一年	◎広島県の比婆山中に、背たけ一・六メートル、逆三角形の頭をした類人猿出現。
一九七二年	◎茨城県土浦市で、河童のミイラの手が発見された。

▶妖怪〝笑いはんにゃ〟は、とくに子どもの生首がすきだというが…。

＊妖怪がこのむ場所と時間

妖怪は、なぜ夜をこのんであらわれるのだろうか。横井也有という江戸時代の人が、あるとき幽霊に、こうたずねてみた。

「どうして夜にばかりでるのか」

「昼間は、子供がおもしろがってはやしたてるので、わずらわしい」と答えたという。子供には、幽霊はおもしろくみえ、うしろめたいおとなには恐ろしくみえるということらしい。

しかし、妖怪がでるのは四つの時間帯があって、夜八時、夜十時半、夜中の十二時、そしてうしみつどき（真夜中の午前二時）となっている。魔力の強いものほど早くから出現し、弱いものは遅くなってから出るらしい。つまり、妖怪は夜気をすえばすうほど、だんだん魔力をそなえ、化ける超能力が強くなるからだ。

また、妖怪はホタルの光のように、暗くても人間に見えるように、自分で特別の光を発しているが、太陽の光にあたると、その能力を失なってしまうといわれている。

それに、妖怪は山や川、海や空中、冷たい雪とか地下などにそれぞれすんでいるが、みんな自分の能力をだしやすい場所を選んでいるわけだ。それで、水には強い妖怪・河童なども、頭のサラの水がなくなると、たちまち魔力を失なってしまうのだ。

5 百鬼妖魔*

妖怪のなかには、まったく姿を見せないものや形のきまらないものなど、まさに千変万化である。
また、妖怪は悪いことをするとはかぎらず、人間にとって役に立つものもいる。ここでは変わった妖怪を見てみよう。

▲真夜中すぎになると妖怪がむれあつまる。

ほうこう

山ふかい森には、なん百年もたった古い木がある。そんな木には、ふしぎな妖精がとりついて恐ろしい妖獣・ほうこうを、うみだすのだ。木を切ろうとする人は、たちまちこの妖獣におそわれ口からはく紫色のけむりで全身をとかされるという。

首かじり

秋のひがん（九月二十日〜二十七日）のころ、夜二時すぎになって、ふと血なまぐさいにおいがただようことがある。
なま首をかじった、恐ろしい幽霊・首かじりが、たらーりと血をたらして、あらわれたのだ。

「うらめしや……わたしの首はどこへいったのだ。みつからぬうちは、いつまでも墓あらしをするぞよ」という声。
首なし死体で墓にうめられた人の幽霊が、首かじりなのだ。自分の首をさがしあてるまで、他人の墓をあらすという。

▼江戸時代，いまの滋賀県によくあらわれたという片輪車は，へりくつばかりいって泣きわめく子を地獄へつれて行くという。

*片輪車

夜おそく、人びとが寝しずまったころになると、表通りをガラガラと車のきしる音がする。いつまでも夜ねむらないで、泣いている子どもや赤んぼうをさらって行く妖怪〈片輪車〉が、あらわれたのだ。

ところが、そんなこととは知らないある人が、なんの音だろうと戸をあけてみるとものすごい火につつまれた片輪だけの車に美しい女の人がのって走って行く……。

そして、家の中へもどると、自分の子どもが、いつのまにか姿を消していたのだ。

妖怪・片輪車のことを知ったその人は、「私の子は、泣いてなどいなかったのに、どうしてさらったのだ」となげいていると、まもなく子どもが帰ってきたという。

おんもら鬼

さびしい森や野原で道にまよい，たべるものもなくなつて，人知れず死んでしまった人の魂が，おんもら鬼になった。だから，うっかりそんな森や野原へはいりこむと，ギャッギャッとぶきみに鳴くおんもら鬼が，口から火を吹いて，食物をさらって行ってしまうのだ。

ものの化

どんなものでも、だんだん古くなるほど魂がやどって、夜中に動きだすという。そして、古いものをそまつにした人のところへ、ふくしゅうにくるといわれる。

蛇帯

古くなった帯がヘビになって、人間の首をしめて殺すことがある。

笈の化物

音、山伏が背おって使った笈という荷物いれには、死霊がとりついて妖怪になった。

一本足のから傘

やぶれてしまったからかさは、だれでも、じゃまものとばかりすててしまうもの。そこで、うらみにおもったからかさが妖怪となって人間をおどろかしたといわれる。

小そでの手

長く使った着物には、まるで生きもののように手がでてきて持ちぬしに、とてもじょうずにきせてくれるという。

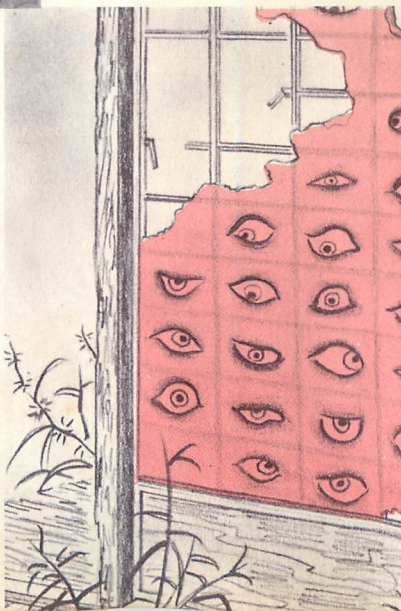
お化けちょうちん

すすけて，やぶれたままにしておいた古いちょうちんに火をともすと，幽霊をうつしだして，びっくりすることがある。

すずりの魂

百年以上も使ったすずりで書くと，すばらしい字がかけるという。

目目連

やぶれて古くなったしょうじをほうっておくと，夜中ににらまれて気ちがいにされる。

火車

火車は、悪事をかさねた人をむかえにくる地獄の使者だ。夜になると墓地をうろついて死体をほりだし、心臓をむしりとってたべるのだ。そして、もえる火の車にその死体をのせ、悪人の家に投げおとして行くという。

江戸時代には、いまの東京の浅草にあらわれ、心臓をえぐりとった死体が投げおろされた家には、その日のうちに新しい死人がでたといわれる。

火の妖怪

つるべ火

木の枝から、とつぜんぶらさがってもえる火で、木の妖精があやつっている。

ふらり火

墓もたててもらえなかつた死人の魂が，ふらふらともえてさまよう火。

うばが火

じゃまになったからと山にすてられて死んだ老婆のうらみが、もやす火。

不知火

夜の海になん百という火の玉が、ふわふわとゆれてもえるもの。

そうげん火

あれはてた野原で、ずっと昔、死んだ武士などのうらみが、恐ろしい顔つきの姿でもえあがる火。

みの火

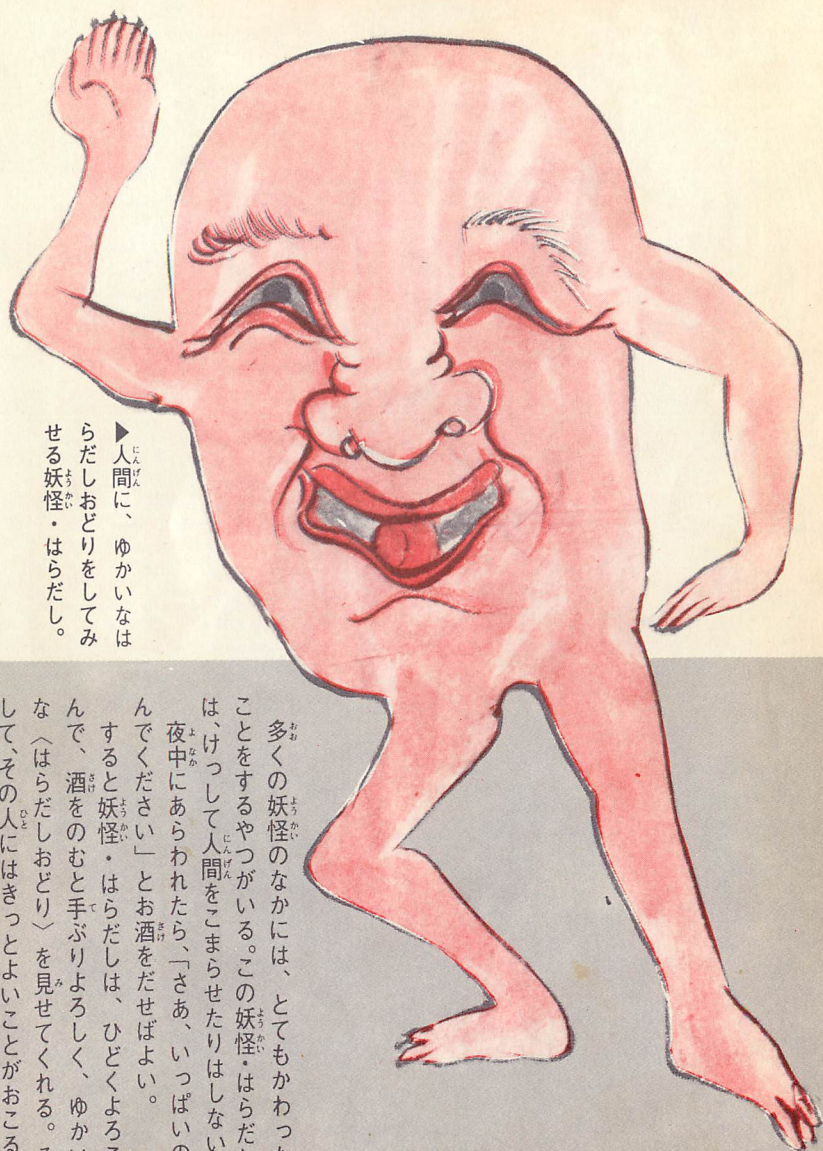
雨のふる夜、農家の人が着ている〈みの〉にまとわりついてもえる火。

ぬえ

平安時代のこと。いまから八百年ほどまえには、妖怪・ぬえが、さかんに京都にあらわれた。

この妖怪は、頭はサルでからだはトラ、しっぽがヘビというおそろしいすがたをしていた。ふつうは山の奥にすんでいて、鳥や動物のたましいをたべているので、百年以上も長生きをする。そして人間の魂を食べると、さらに長生きをするという。

源三位頼政という武士は、この妖怪を弓矢で射てたいじした。

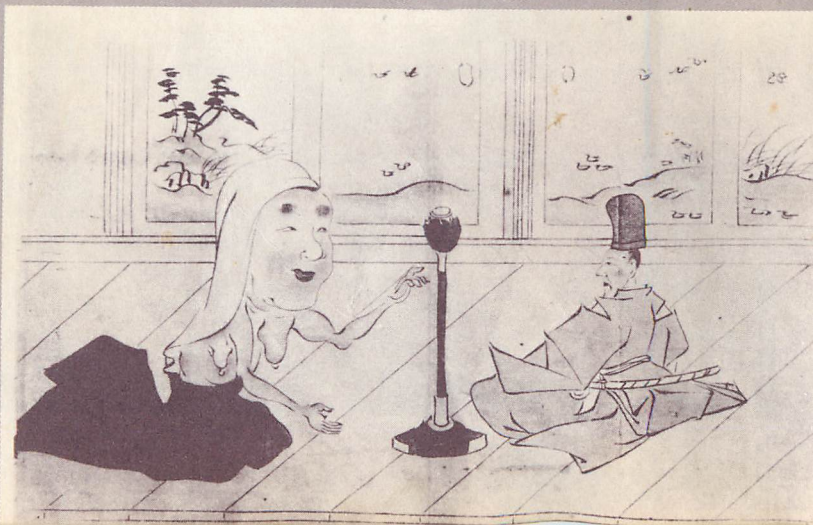
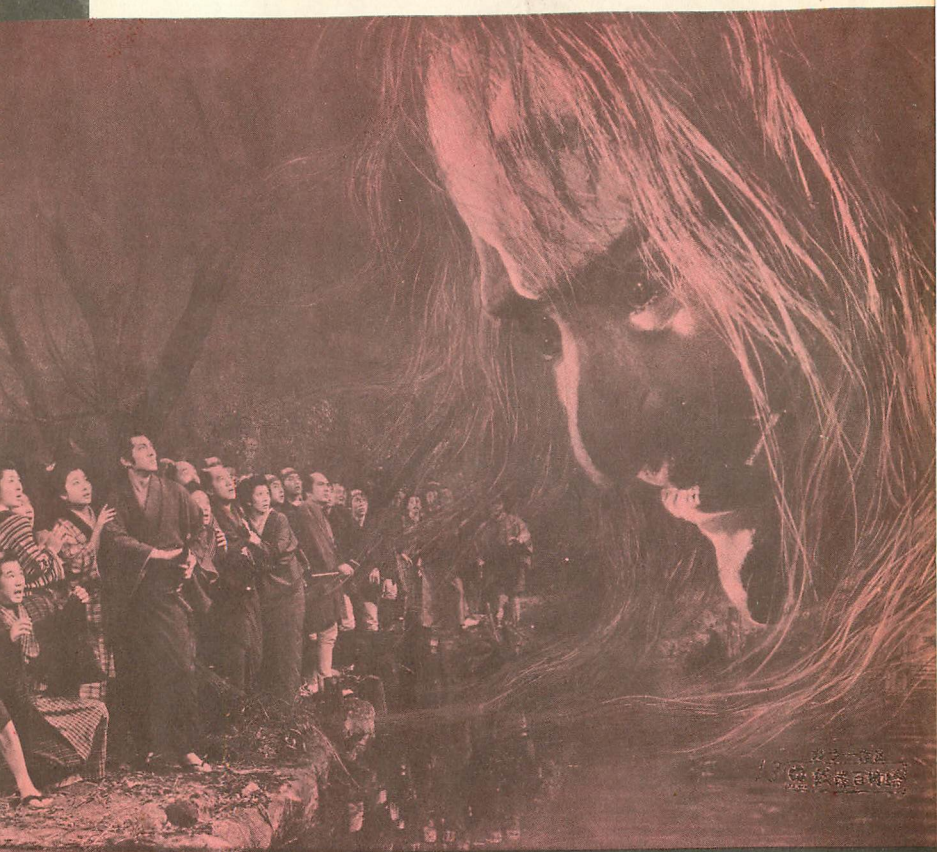
はらだし

▶人間に、ゆかいなはらだしおどりをしてみせる妖怪・はらだし。

多くの妖怪のなかには、とてもかわったことをするやつがいる。この妖怪・はらだしは、けっして人間をこまらせたりはしない。夜中にあらわれたら、「さあ、いっぱいのんでください」とお酒をだせばよい。するど妖怪・はらだしは、ひどくよろこんで、酒をのむと手ぶりよろしく、ゆかいな〈はらだしおどり〉を見せてくれる。そして、その人にはきっとよいことがおこる。

*すっぽん

カメとよくにた動物スッポンは、くいついたら最後、首を切られてもはなれない。それほど、しゅうねんぶかいのだ。

それで、殺されたスッポンは、動物であっても、死んでからまた幽霊になってでるという。スッポンを百ぴきも殺したある人は、なんと大きさ九メートルもの、スッポン幽霊にのろい殺され、その奥さんが生んだ子は、スッポンそっくりだったという。

▼これは，頭がおなかほど大きい女の妖怪ではらだしの仲間。

大首

どろりと黒くにごった，ぶきみな沼。そんな沼には，そこで死んだ人たちのうらみが集まって，恐ろしい妖怪・大首となってあらわれるのだ。

とつぜん，沼の水面がざわざわとゆれ動くや，顔の大きさ3メートルもの大首が，水中からぬっとでてくる。そして，大首は空中にうかびあがると，長い髪をぶきみにのばしてくるのだ。それにふれた人は，たちまち気が狂うという。

＊舞首

夜の海で、火をはく風車のようなものが、ものすごい勢いでぐるぐるとまわっていることがある、そして、大声でどなりちらす声がきこえてくるのだ。

「おまえが、悪いのだぞ！」

「いや、おまえこそ悪いやつだ！」

「やはり、きさまが裏切ったのだ！」

これは三人組の悪人が、おたがいに罪をなすりあって殺しあい、死んでもなお三人が争う生首の妖怪だ。しかし、おもしろがってからかうと、急に三人の生首が協力しておそいかかってくるという。

どろた坊

水田のどろで足がぬけないことがある。どろた坊が足をひっぱっているからだ。長い間、水田に水をやらないと、家の中までやってきて、どろだらけにされる。

＊あかなめ

あかなめは、ちょっとへんなことをする妖怪だ。夜中に人がねてしまうと、こっそりお風呂場にやってきて、湯どのや湯おけにこび

＊こくり

妖怪・こくりは、まるで、鬼婆のように恐ろしくて、ものすごい欲ばりだ。暗い屋根裏とか古い土蔵の中にこっそりとかくれている

りついたあかをペロリペロリとなめるのだ。
また、病気で長い間苦しんでねている人のあかを、きれいになめおとしてくれるという。
「あかなめさん、きっとまた来てね」
といわないと、二度とはあらわれてくれない、礼儀もわきまえためずらしい妖怪だ。

が、夜になると仏壇にあげておいたくだものやおかしをぬすんでたべる。それでも、たりなくて外へ出ては、うどん屋とかラーメン屋さんのものまでかすめとる。お寺や神社のおさいせんまで盗み、お葬式があればカンオケの中にもぐりこむ。いま死んだばかりの死人の皮を、鋭いツメでバリバリッとはいで、むしゃむしゃとたべてしまうのだ。

さがり

昔から岡山県によくでた妖怪だ。森の中や道ばたの木の枝から，急にぶらりとさがって，人をおどろかせたという。

ぬらりひょん

年のくれになると、どこからともなくあらわれる妖怪だ。大そうじなどでとてもいそがしいのに、家の中にはいりこんで、どっかりとすわりこむ。
どけようとしても、ぬらりくらりとして、つかまえようのないへんな妖怪。

＊いやや

その昔、長崎県のある村にこの世の人とは思われぬほど美しい娘がいた。そのうわさをきいた若い男たちが、次つぎと結婚をもうし

＊ほうそうし

夜中に子供がねむっているへやにしのびこんでくる妖怪。二本の角と六つの目をもち、右手には剣をかまえている。

こんだ。娘の返事は「いやです」とくりかえすばかり。娘は自分の美しさをハナにかけていたのだ。ところが、ある夜のこと恐ろしい鬼があらわれて「このわしと結婚しないなら、いますぐにもひきさいてたべるぞ」といったので、娘は「結婚します」と答えた。

　すると鬼は「みにくい鬼と結婚するくらいなら、なぜ人間と結婚しないのだ」といって、娘の顔をみにくく変えてしまったという。

「どうだ、病気にかかるのが恐ろしいか、恐ろしくないか。どんな病気でも、がまんできるか」と子どもにささやくのだ。病気がこわくないといえば、たちまち姿を消すが、病気が恐ろしいと答えると、剣でさんざん切りつける。その傷口はどろどろにくさるという。

ばく

夜，ねむっている人のまくらもとにあらわれる。長いゾウのような鼻さきから，ねむっている人の悪い夢をどんどんたべてしまう。だから，この妖怪〈ばく〉を見た人はいない。

さとり

その昔、岐阜県の山奥にすんでいたゴリラのような妖怪。頭の上から足のさきまで、まっ黒い長い毛がふさふさとはえていた。

ところが、人間にはちっとも害を加えないどころか、人間の心をすべてよみとってしまうという超能力をもっていた。

「ああ、おなかがすいたな…」と思っていると、のっそりとあらわれでた妖怪・さとりが、あけびや山ぶどうをいっぱい手にもってどさりと投げだすのだ。しかし、さとりを殺そうとした猟師は、反対に殺されてしまったという。

*血塊

ねこほどの大きさで、からだの色は灰色。夜になると、ねむっている人間におそいかかった。鋭いツメで人間のハラを引きさいてか

*おぼろ車

まるで四次元の世界からあらわれたようなふしぎな車だ。一瞬、つむじ風がまきおこると、かすみがかかったような車がぼんやりと

ら、ふきだす血をのみ、人間のはらわたをみんなたべてしまう恐ろしい妖怪だ。
人間の血だけで育った妖怪なので、血塊と名づけられたが、赤と白の舌が二枚ついていた。赤いほうの舌で血をあじわい、白いほうの舌で人間の脳みそをすするのだという。にんにくを身につけておくと、おそわれない。

▼明治時代には，この血塊がよく見世物にされて人々をおどろかしたが，じつは東南アジア産の夜ザルだった。

うつるのだ。
弓矢でうち、剣で切りつけ、鉄砲でうっても、みんなスイスイと通りぬけてしまう。そして、音もたてずに地面を走ったり空を飛んだりするのだ。光をあてれば影絵となり、水をかければカガミのような車となり、火を近づければものすごい炎の車となった。あまりいたずらがすぎると、ついに鬼の顔があらわれ、人間はあっというまに鬼の口の中へすいこまれて、煙のようにとかされるという。

いんね火(び)

さびしい沼や川に，人間のような形をした，ぶきみな火がもえることがある。これは，愛しあった男女が，その沼などで自殺して死んだうらみの火だという。

二面相の妖怪

＊二口女

いまから五百年ほど昔のこと。島根県の出雲地方に、とてもくいしんぼうな娘がいた。食べ物のにおいをどこからでもかぎつけ、人がねしずまってから、こっそりと一人でたべてしまった。

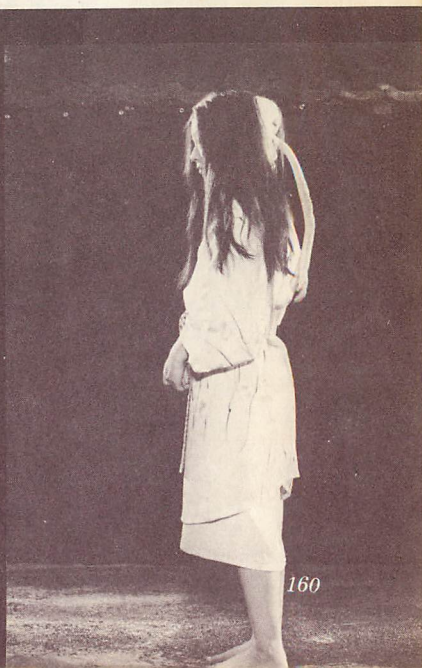
　そして、とうとう他人の家にまで夜中にしのびこみ、赤ちゃんのためにとっておいたものまで盗んだ。

　しかし、娘はとても美しかったので、だれ一人として、そんな盗みをはたらくひどいくいしんぼうだとは思ってもみなかった。すると、娘はそれをよいことにますます遠くの村にまで出かけて、食べ物を盗んであるいた。ところが、ある日。娘のまえに仙人があらわれていった。

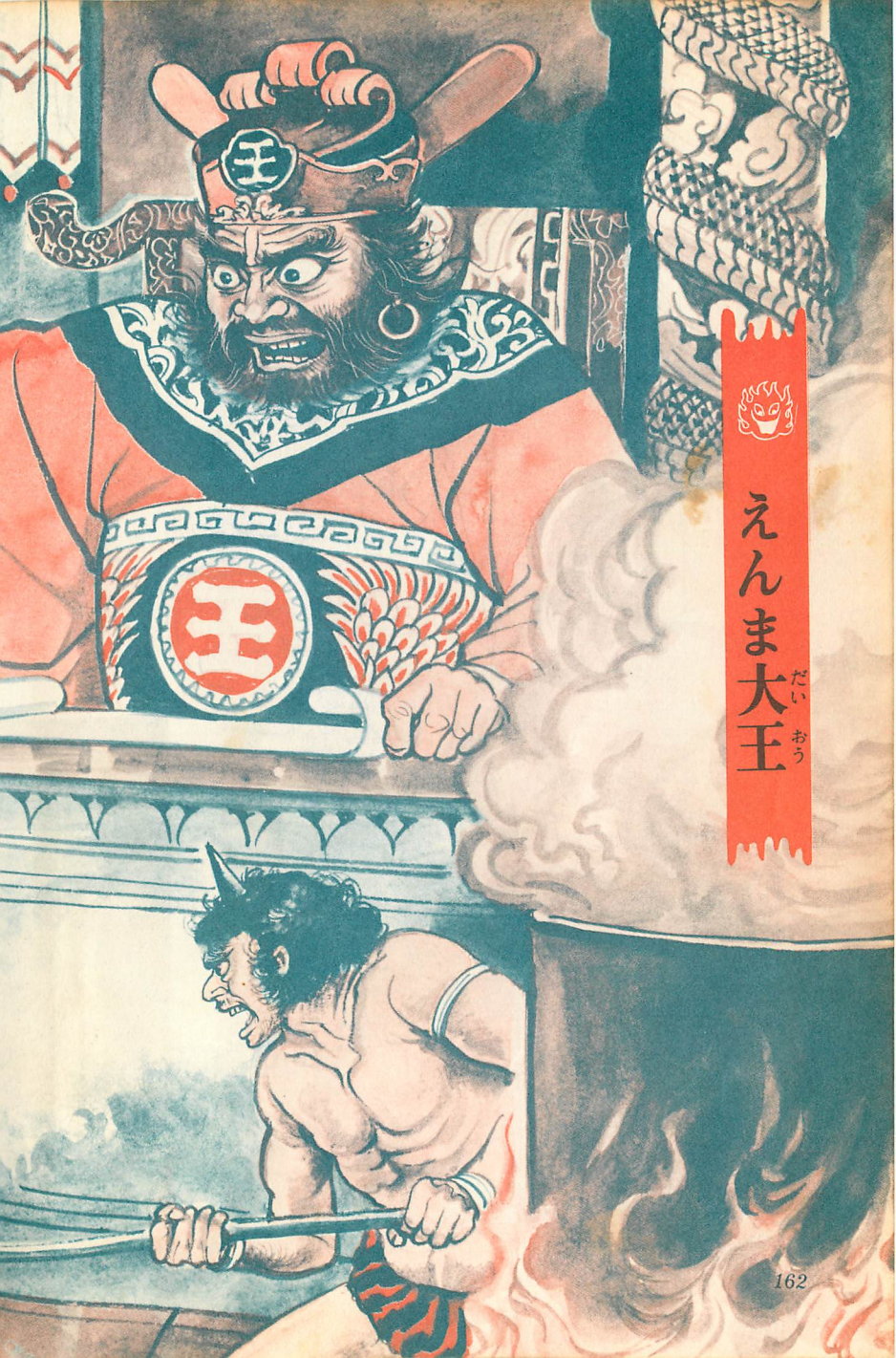
「娘よ。そんなにたべて、おなかをこわさないのかね」

＊二面女

二面女は、まるで天女のような美しい顔をしている。ところが、うしろをふりむくと、おそろしくみにくい顔が、もう一つある。ハナのところからは、長いほそい手がぶらりとさがっているのだ。

　ところが、この二面女と出あったら、けっしてにげたりしてはいけない。もうひとつのおそろしい顔を見てしまっても、だまって二面女のそばにいることだ。ほんとうは、二面女は、おそろしい妖怪から人間をまもる妖怪

▼うしろの口でも、ものをたべる二口女

「とんでもありません。おいしい物があれば、もう一つ口がほしいほどです」娘が答えたとたん、娘の頭のうしろには、もう一つの口がついたという。

なのだ。妖怪におそれわれてケガをすると、二面女はやさしくかいほうしてくれるし、みにくいほうの顔についた長い手で、妖怪とたたかってくれるからだ。

えんま大王(だいおう)
王
王

地獄の国には、えんま大王や青鬼・
赤鬼たちが住んでいる。死んで地獄へ
やってきた人間の罪をあばくために、
えんま大王の地獄の裁判をひらく。
もし、悪いことをした人がウソをつ
いても、このふしぎなカガミにほんと
うのことがうつるので、たちまち鬼に
舌をひきぬかれてしまうのだ。
ISHI

餓鬼

つまみ食いや盗み食いをした人、食物をひどく高い値段で売りつけて他人を苦しめた人、うえ死にしたコジキなどが、死んでから餓鬼の亡者になるという。

餓鬼は、うえとかわきに苦しみ、どんなものにも手をだし、死体の骨までガリガリとたべる妖怪だ。たべてもたべてもやせおとろえていて、腹だけがものすごくふくらんでいる。この餓鬼にとりつかれると、その人までが餓鬼のようになり手あたりしだいに、なんでもむさぼり食う人間となるのだ。それで、餓鬼にねらわれたときは、少しの食物をあたえておき、そのスキにさっと逃げることだ。

＊生霊

生霊とは、生きている人の魂のことをいう。人間の分身のようなものだ。とくに、重い病気になって死にそうなとき、人間の魂がとびだして行って、肉親の人や友だちのところへあらわれる。虫の知らせというのも、この生霊がやってきて知らせるのだといわれる。

また、呪いの魔術によって、にくらしい相手の人を苦しめるという場合も、呪いをかける人の魂が、生霊となって相手の人を苦しめるのだという。

＊死霊

死霊とは、文字どおり死んだ人の霊魂のことをいう。ふつうは幽霊のことをいうが、生霊とちがうところは、魂のおがないことだ。生霊の場合は、人間と生霊とは目に見えない糸のようなものでむすばれているが、死霊の場合はその糸のようなものがない。また、死霊はすべて幽霊になるとはかぎらず、多くの死霊が集まって恐ろしい妖怪になることもあるという。

植物の妖怪

昆虫や動物にも魂があるように，植物にもふしぎな妖精や木霊がやどっているという。とくになん百年もたった古い木や長生きをしている植物には，強い魔力がそなわるという。

しかし，妖精や木霊はとうめいなので，めったにその姿を見ることができない。

古つばきの霊

◀古いつばきには、人間を病気にさせる恐ろしい霊があるという。だから病気の人のお見まいに、つばきの花をもって行ってはいけない。

芭蕉の精

▶芭蕉にはふしぎな妖精がいて，キリのようなものをはいて人間をねむらせる。

野づち

▶道ばたや野原にはえている雑草など、たくさんの草の魂が集まって、野づちという妖怪になる。ウサギや野ネズミがつかまってとかされてしまうことがある。

逆柱

▶家を建てるとき、柱をさかさまにして建てると、その家に次つぎと悪いことがおきるという。

木霊

▶なん百年もたった老木には、みな魂がやどっているという。古い松の木などをたいせつにすると松の木の魂がその家によいことをはこんでくれるそうだ。

花の妖精

▶花には美しい女の人の姿をした妖精がいるので、たいせつにすると、よい夢を見せてくれるという。

疫病神

疫病神は、恐ろしい伝染病をはこんでくる妖怪だ。ペストやセキリ、エキリなどをうつす妖怪が、それぞれ一人ずついて、みんな鬼のような姿をしている。

　きたない川や沼、ゴミためや便所の中にかくれていて、ハエやカなどの足にぶらさがって遠くまで飛んで行く。しかしその姿はとうめいで、人間には見えないので、とりつかれてもわからない。はじめは小人のように小さいが、人間にとりついて病気を重くさせると、だんだん大きくなるという。この疫病神の正体は、いまでは伝染病をおこすバイキンだとわかっているが、昔の人びとは伝染病をなおす方法も知らなかったので、疫病神という恐ろしい妖怪のせいだと信じたのだ。

＊ぶるぶる

　さびしい森やぶきみな墓場などは、ひるまでも、なんとなく恐ろしいような気がするものだ。そういうところには、ぶるぶるという妖怪がすんでいるからだ。冷たいおくびょう風をふかせて、人間をこわがらせてしまうのだ。また、この妖怪・ぶるぶるに一度とりつかれると、夜中にトイレに一人で行けなくなったり、高いところをこわがり水泳さえ、こわくなるという。

*うしろ神

昔から「うしろがみをひかれる」といういいかたがある。とても仲のよい友だちや兄弟やお父さん、お母さんなどとわかれなければならないとき、どこからともなく、うしろ神がやってくるという。わかれるとき、なぜか、かみの毛をひかれるような気がして、わかれたくない気もちにさせるのだ。うしろ神は、だから人間どうしがいつも仲よくすることをねがう、よい妖怪だ。

くびれ鬼

大きな池や古い沼にすんでいる妖怪。夕方になると，水の底から音もなくあらわれて，いきなり人間を沼の中へひきずりこんでしまう。その沼や池で，おぼれて死んだ人のうらみがこの世にのこって，くびれ鬼となった。

手あらい鬼

いまから五百年ほどまえ。香川県の高松地方には、雲の上までとどきそうな大きな鬼がでたという。川上の山のほうで、夜になるとザブンザブンという、ひどく大きな水音がするので、村の人たちが山道をのぼって行ってみた。すると、谷から谷へと川をまたいでいる、ものすごい大きなものがいるではないか。

それは、なんと、数十メートルものバカでかい鬼が、川の水で手をあらっているところだったという。

＊やまひこ

たった一人で山奥へ行くときには、うっかり「やっほうー」とさけんではいけない。山の向こうから妖怪・やまひこが、人間の声で「やっほう」と答えてきて、近くに人

＊小豆あらい

小豆あらいは、日本全国にいる妖怪で小豆をとぐような音をたてる。山の谷川で、夜になると、ぶきみな声でうたう。

「小豆をとごうか……人をとって食おうか……ジャラ、ジャラ」

そこで、そっと足音をしのばせて近づくと姿はない。ヘンだなと思っているとまた谷川の奥のほうでジャラジャラ音がする。音だけのふしぎな妖怪だ。

がいると思わせるからだ。なん度も声をかけていると、いつのまにか道にまよって帰れなくなる。しかし、いまではその正体も山の反響音だとわかっている。

大入道

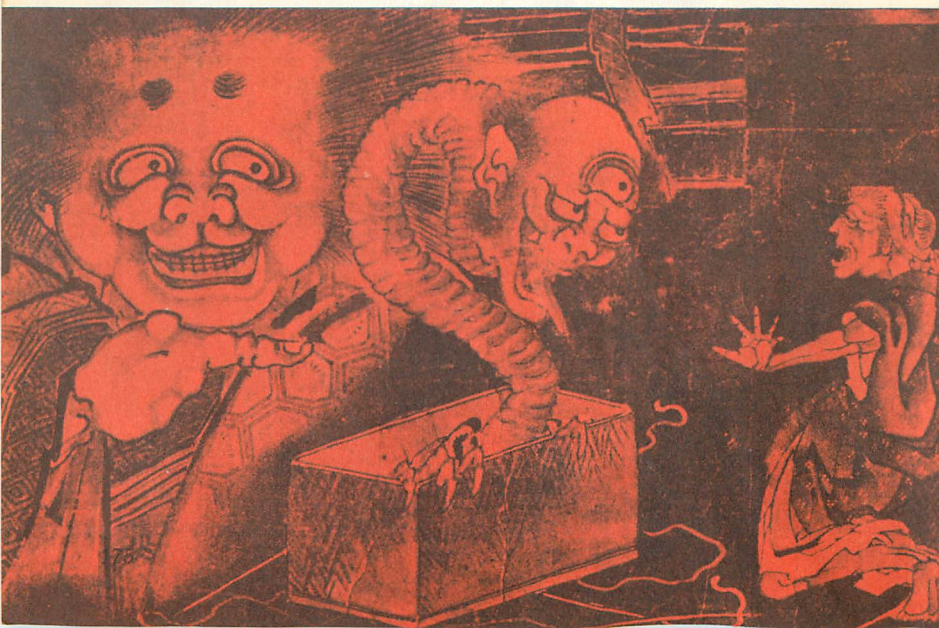
◀たぬきが化けた二つ目大入道は、ただびっくりさせるだけ。

大入道には、いろいろな種類があって、黒坊主という黒い二つ目大入道やたぬきが化ける一つ目大入道、二つ目大入道などがある。たぬきが化けた大入道は、うしろからついてきて、いきなり長い舌でペロリと顔をなめたりするだけだが、ほんとうの大入道はものすごく大きく、人間をおしつぶすという。

＊一つ目大入道

一つ目大入道は、たいてい、たぬきが化けたものだ。どてらを着て大きな鉄棒をもち、どすんどすんと音をたてて人間をおどろかす。左の絵の一つ目大入道は、その昔、高知県にあらわれて、大きな筆で、空中に百種類もの妖怪をかいてみせたという。

▼この三つ目の大入道は，ろくろ首の仲間で人間を殺すことがある。

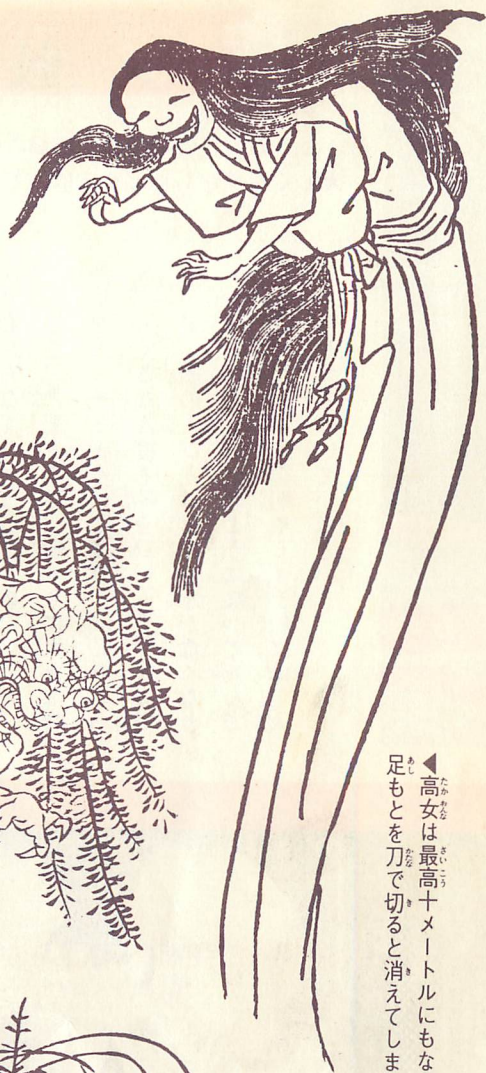
びろ〜ん

この妖怪は、またの名を〈ぬりぼとけ〉ともいう。「びろ・びろ・びろーん」という呪文をとなえて、ほとけさまに化けようとしたところ失敗してこのような姿になったのだ。

全身がコンニャクのように、ぶよぶよしていて、そのしっぽで人の顔や首をなでる。塩をかけると、消えていなくなる。

＊高女

江戸時代のこと。ある武士が宿にとまると、一階のへやで白い着物姿の女にあった。階段をのぼって二階へ行くと、その女の背がどんどん高くなって、にたにた笑った。武士はおどろいて二階から落ちたという。

*うわん

夕ぐれどき、古寺の近くをとおると、ぶきみな声で「うわん」とたずねられることがある。すぐに、「うわん」と答えないと、棺おけの中にひきずりこまれてしまう。この妖怪は墓場の主だ。

◀高女は最高十メートルにもなるが、その足もとを刀で切ると消えてしまう。

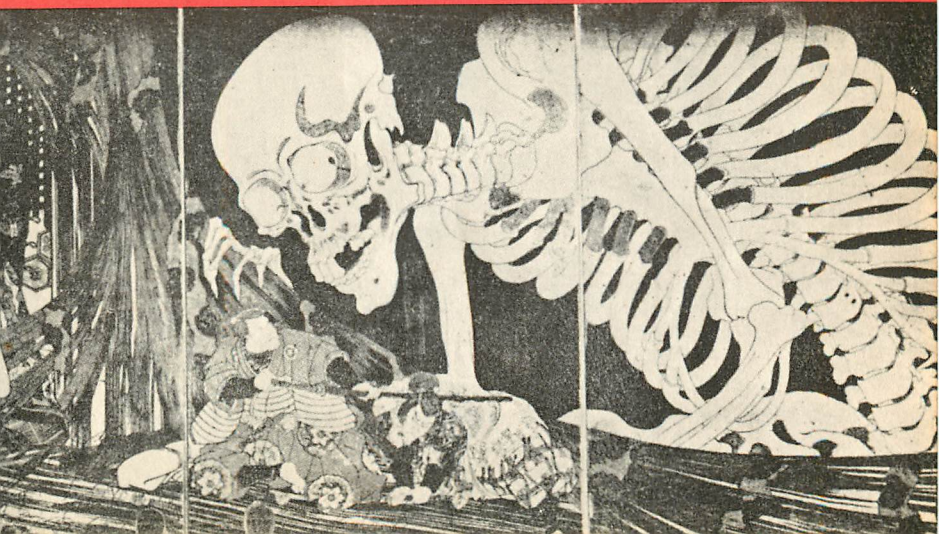
骸骨の妖怪

ふつうの骸骨の妖怪は，墓場の棺おけから出てきたものだが，大どくろやがしゃどくろは，もっとすごい魔力を持っている。

＊大どくろ

大どくろは、もっぱら海だけにあらわれる妖怪だ。海面からものすごい大きな骸骨の頭だけをだして、船をめざして近づいてくる。すると、急に船のまわりにキリが立ちこめ、あたりがくらくなる。方向がさっぱりわからなくなってしまうのだ。

そして、大どくろは、船べりに大きな骨の手をガッチリとくいこませ、同じところをぐるぐるなん度も船をひいてまわるのだ。やがて、船の人びとは食物や水がなくなり一人のこらずミイラのようになって死んでしまう。だから幽霊船やミイラ船には、大どくろがすみついているという。

＊がしゃどくろ

夜中の二時すぎ、外でガシャというものすごい音がする。人びとがおどろいて飛びだしてみると、十メートルもある大きな骸骨が歩いているではないか。妖怪・がしゃどくろは、黄色くもえてぶきみに光る目玉をぎらつかせ、歩くたびに、骨をガシャガシャ音たてながら、人間をとって食おうとやってきたのだ。十人もの武士が刀で切りつけたことがあったが、あっというまに骨の手でにぎりつぶされ、大きな歯でかみくだかれたという。
　この妖怪は、野たれ死にした人のどくろがなん百と集まってできたものだ。

ひょうすべ

ひょうすべは、もともと河童の仲間だったといわれている。九州の宮崎県や長崎県に多くすんでいた。昼は川の水の中の横穴にかくれているが、夜になると田畑にあらわれて、米のおちぼなどをひろってたべている。人と出あうと、ヒッヒッヒッと笑うが、もらい笑いすると熱をだして死ぬという。

◀ひょうすべと出あったら、決して笑ってはいけない。うっかり笑うと高熱をだして死んでしまう。

＊おとろし

夜おそく、神社のそばを通ると、ドスーンという大きなものが落ちてくる音。これは妖怪・おとろしのしわざだ。

神社にいたずらをしたり、らくがきをしたり、とりいに小便をかけたりする人をねらっ

て、おとろしが上から落ちるのだ。まともに当たったら、もちろん死んでしまう。おとろしは、神さまをまもる妖怪なのだ。

＊寺つつき

寺つつきは、仏教を信じない人びとの魂が鳥になったという妖怪。だからあちこちの寺という寺を、そのするどい口ばしでつつき、柱やかべをこわすのが専門だ。しかし、うっかりこの鳥を攻撃したりするとたいへんだ。

その人のあとをずっとつけて飛んできて、その人の家を、つついてこわしてしまうからだ。「ほとけさまは、まだだよ」というと姿を消すという。

天井(てんじょう)さがり
ISHi

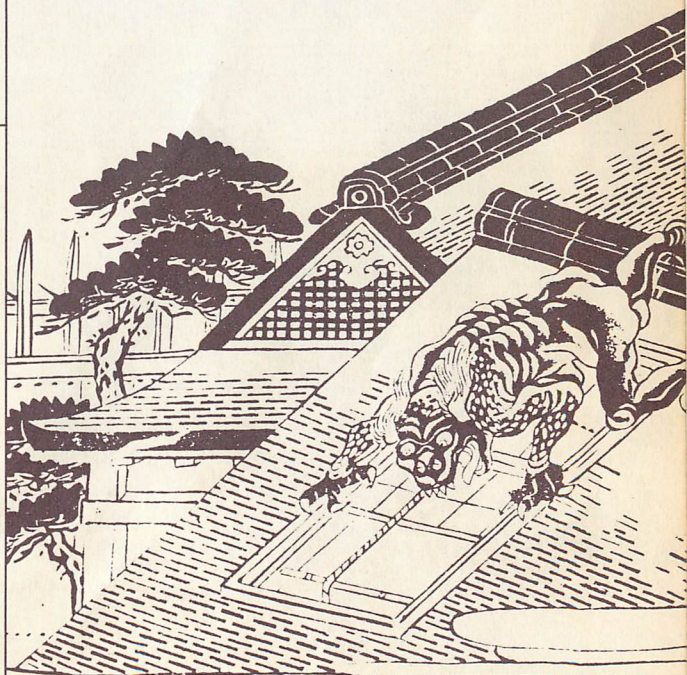
人がねむってしまったころ、天井のふし穴から小さなゴムのかたまりのようなものが、すうっとたれさがる。それは、だんだん大きくなって妖怪・天井さがりに変身するのだ。
やがて、天井さがりは赤く長い舌で人の顔をペロリペロリとなめはじめるが、人がびっくりして目をさますと天井裏へにげてしまう。

しょうけら

しょうけらは、屋根の上の天窓や戸のすきま、ガラス窓などにぴったりとはりついて、家の中のようすをうかがっている。ふろ場ものぞく、ひどくエッチな妖怪だ。全身はかたいウロコのようなものでおおわれていて、手足には三本のするどいツメがついている。そのツメで人間の背中をバリッとひきさくのだ。しかし、人間の目には姿が見えないので、カガミにうつして「わかってるぞ」とさけぶと逃げて行く。

＊天井なめ

＊大かむろ

大かむろは、地獄の国からやってきた恐ろしい妖怪だ。その顔だけは美しい女の人のようにみえるが、からだは骨ばかりで、手には

日本全国どこにでもいる妖怪で、とてもいたずらずきだ。ちょっとの間、人が家をるすにすると、ぴょんぴょんと天井に向かって飛びあがり、その長い舌でなめまわすのだ。
　すると、天井にはきたないしみが点てんとついたり、しまもようになったりして、ふきとろうとしても、なかなかおちないのだ。ところがきたなくなった天井をきれいにしないと、今度は台所とか便所とか、家の柱やかべまで舌でなめまわして、きたなくしてしまうという。

タカのようにするどいツメがある。
　人がねむってしまうと、その人のふとんの前にじっとすわりこんで「地獄へつれて行くぞ」とささやくのだ。ねぼけて、うっかりうなずいたが最期、そのツメで八ツざきにされ脳みそをたべられてしまうのだ。

百鬼夜行

百鬼夜行とは，夜，さまざまな妖怪が列をつくって行進することだ。年をへたキツネやタヌキが，化けることができるように，百年以上もたった古い物は，魂がはいって化けものとなることができる。この考えは，平安時代からおこって，江戸時代にさかんになったが，弱い化けものは姿をけして強い妖怪だけがのこされた。下にあるのは，烏山石燕という画家がえらんだ代表100の妖怪だ。

㊟妖怪の名前の下の数字は、この本のページをあらわす。

▲室町時代に土佐光信という画家がえがいた〈百鬼夜行〉の図。

▼茨城県で発見された河童の手のミイラ？

＊妖怪の正体をさぐる！

妖怪は、すべて人間がかってにつくりだした空想のうえでのものだろうか。竜巻きが恐ろしい竜に見えたり、いつもとちがった川の音にびっくりして小豆あらいではないかと思ったり、たしかに目や耳の錯覚ということが多い。

しかし、まだ科学のすすんでいなかった古い時代には、恐ろしい伝染病は疫病神のたたりだとか、見なれない動物はふしぎな魔力をもった妖怪だと考えたのである。

つまり、未知のものにたいしては、正体がわからないので、すべて妖怪のしわざだと思いこんでいたのだ。けれども、文明が発達してくると、雷獣という妖怪は日本アルプス山中にほんとうにいた動物であることがわかったり、不知火が漁火による光の異状屈折現象であることや、かまいたちは強いつむじ風によって手足のひふが切れるということなどがわかってきた。

ところが、骨のリンがもえておこるといわれている人魂の火やきつね火、幽霊のもととなる霊魂の存在などについては、いまの科学でもナゾはとかれていないのだ。

また、昭和四十七年五月に茨城県土浦市の満城寺で発見された河童の手のミイラは、たしかに水かきと長いツメがあるので、河童はほんとうにいたのかも知れない。

6 日本の妖怪地図＊

〈狂骨〉は，古い井戸の中にいる白骨の妖怪で人間をひきずりこむ。

妖怪を地方別にわけてみると、おもしろいことに気がつく。東北には雪女、日本海岸には人魚、四国には犬神というように、その地方の風土によって、いろいろな特徴をあらわしている。あなたの地方には、どんな妖怪がいるだろうか。

日本の妖怪地図

雪女（東北）

天探女（宮城）わがままな子供に角がはえた。

天狗（全国）天狗のゲタとかウチワなど、各地にその遺物がのこされている。

一本松の女（千葉）松の木のそばに立って人をまねき、足をひきずって一本だけ食いちぎる。

鬼ばばあ（東日本）

妖怪名所ガイド

①北海道空知郡栗沢町の万念寺には、人形の髪の毛が50年間ものびつづけている〈お菊人形〉がある。

②青森県の八甲田山の森には、かくれ里といって、消えたりあらわれたりするふしぎな村がある。

③青森県の恐山では血の池とか針の山とか、地獄そっくりの風景を見ることができる。また、死んだ人の魂をよびだして話をさせてくれるという、ふしぎな巫女もいる。

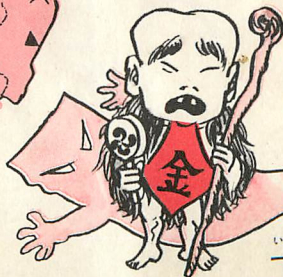
④岩手県の遠野地方は、いまでも河童や化けたぬきなどの妖怪がたくさんいるところ。つい最近も河童を見た人がいるそうだ。

⑤東京の四ツ谷怪談で有名なお岩さんの墓を見たい人は、巣鴨駅の西の妙行寺へ行くとよい。

⑥長野県の御嶽山には、サイの河原とよばれる山上台地があり、そこでは運がよい人は、ものすごい人魂の火のむれを見ることができる。

⑦鳥取県米子市の日野橋のたもとには、雨のふった夜、母親とその子供をつれた子づれ幽霊がでる。

⑧広島県比婆郡西城町の比婆山には、これまでなん度も類人猿があらわれている。背たけは1.6メートルほどで、全身が毛でおおわれ、顔は人間ににていて、妖怪〈さとり〉にそっくりだともいう。

海坊主（全国）
河童（全国）
淡水人魚（北海道）
かわいさにつられて泳いでいると帰れなくなる
火取り魔（石川）
人魚（日本海岸）
マー（沖縄）
形のない妖怪だが、大きな口がどんどん開いて人間をのみこむ
●＝海坊主
▲＝河童
□＝人魚
×＝犬神
⊙＝天狗
ぬりかべ（福岡）
小豆あらい（鳥取）
子泣きじじい（徳島）
犬神（四国）
いそ姫（長崎）
一反木綿（鹿児島）
ひらひら現われておどろかすだけ

北海道・東北地方

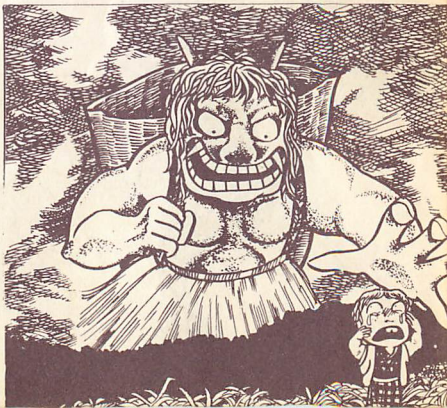
〈北海道〉パウチ

アイヌにつたわる妖怪で、ふつうは天国にいるが、ときどき地上におりて野原で輪になっておどっている。このパウチの親分はものすごい美人で、歩いても足音がしない。人間を手まねきして、魂をすいとってしまうが、東のほうに向いて逃げると命がたすかる。
〈淡水人魚・人くい河童・あざらし女・牛僧〉

〈青森県〉かます

背の高さが5メートルもある巨人の妖怪で山の奥にいる。泣いている子供がいると，その声を聞きつけて風よりも早く走り，子供をつかまえて背中のかます(ワラで作ったフクロ)にいれてしまう。あとで，ゆっくりと食べるのだ。
〈雪女・河童・土ぼうず・化けガニ〉

〈秋田県〉七色鳥

山の上から飛んでくるふしぎな鳥の妖怪で，金，銀色，赤，紫，青，緑，だいだい色の七つの光をはなつ。この鳥を見た人は，たちまち目がつぶれてしまうが，そのかわりに金や銀などがでる鉱山のありかをおしえてくれる。
〈雪女・八郎太郎・もうこ・なまはげ〉

〈岩手県〉 お白さま

ある美しい乙女が、馬を好きになったあまり、雷のなる夜に天へのぼっていった。その魂が、お白さまという神さまになった。馬やぶた、牛などを殺してその肉をたべると、恐ろしいたたりがあって気が狂ってしまうという。

〈ざしきわらし・山男・河童・山女〉

〈山形県〉 化けねこ

大きさ2メートルもある化けねこが山の奥にすんでいた。人間を骨までしゃぶり、たぬきやきつねを使って人間をだました。背中の毛を1本ぬくと、たちまち火となってもえあがるという恐ろしい魔力をもっていた。

〈天狗・さとり・山じじい・ひひ〉

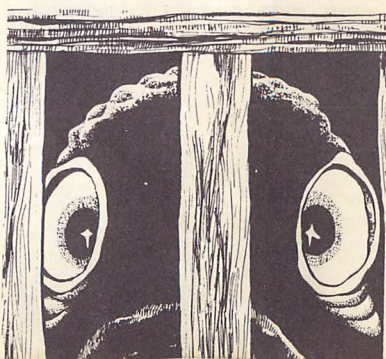
〈宮城県〉 鬼子

仙人のいかりにふれた鬼子は、こけし人形にされてしまったという。もとはといえば、わがままな《あまのじゃく》な子供が、頭に角がはえてみっともなくなったのをすねて、雪や霜をふらせて農作物をダメにしたからだ。

〈白蛇・化けねずみ・えんま王・鬼女〉

〈福島県〉 がんばり入道

夜中に便所に行くと、窓の外からのぞいている黒い入道だ。キキッとかチチチッと鳥の鳴きまねをするので、すぐわかる。大みそかの夜に便所へ行って「がんばり入道ホトトギス」とまじないをとなえると、あらわれなくなる。

〈鬼ばばあ・ねぶとり女・化けウナギ〉

関東地方

〈東京都〉お岩さん

江戸時代のことだ。いまの東京・四ツ谷に住んでいた民谷伊右衛門という武士は、自分の出世のじゃまになるからと、妻のお岩に毒をのませた。髪の毛がバサバサぬけ、顔がひどくはれて、お岩は死んでしまった。だが、お岩は幽霊となって伊右衛門をのろい殺す。
〈火車・のっぺらぼう・ろくろ首・毛女郎〉

〈栃木県〉かまいたち

姿は動物のいたちに、とてもよくにた妖怪だ。ものすごい、つむじ風やからっ風とともにあらわれて、あっというまに人間の手足を切りつける。カミソリで切られたようにスパッと傷がつくので、人々はとても恐れをなした。
〈殺生石・二口女・狂骨・鬼ばばあ〉

〈神奈川県〉生首投げ

鎌倉には、ふしぎな亡霊がいた。大工の姿をした亡霊が松の林にかくれていて、人がとおりかかると生首をたくさんかかえてあらわれるのだ。そして次から次に生首を投げつける。しかも生首は空中で消えてしまうという。
〈むじな・天狗・きつね火・大がま〉

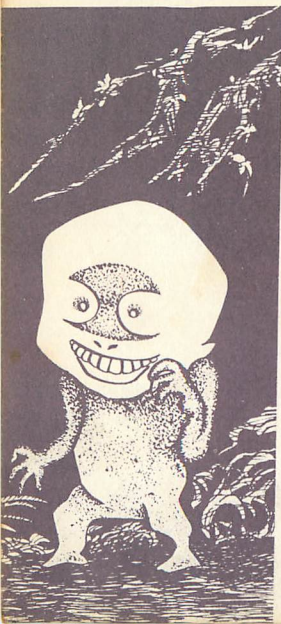
〈茨城県〉 生き白子

築波山の地下のふかいところに、赤んぼうのまま百年間も生きていたという恐ろしい妖怪。赤んぼうなのに、髪の毛がまっ白くて、地面の下から女の人の足をつかむ。おそわれた女の人は頭の毛がたちまち、まっ白になるのだ。
〈河童・大なまず・大赤えい・みずち〉

〈千葉県〉 十字だぬき

背中に銀色に光る十字のマークをつけた、ぶきみな黒いクマの妖怪だ。この十字のマークが、いっそうキラキラと輝くと、魔力で一つ目小僧に化けたり、まるい十五夜のお月さんに化けたりして、人間をびっくりさせる。
〈河童・一本松の女・化けアワビ〉

〈埼玉県〉 そで引き小僧

夕方、一人で、さびしい道を歩いていると、だれかうしろから、そでを引くものがある。おどろいてふりかえるとだれもいない。歩きだすとまた、そでを引かれる。それが、そで引き小僧だ。
〈はんにゃ・河童・鬼女〉

〈群馬県〉 人食いヒル

300年まえ、いまの館林市近くに大きな沼があり、ここに目に見えないほど小さなヒルがたくさんいた。この沼の水をのんだ人は、おなかの中にはいったヒルがどんどん大きくなって体の中を食いあらされて死ぬという。
〈化け馬・歯黒べったり・ろくろ首〉

北陸地方

〈新潟県〉海坊主

空は青くはれわたって、海の波は静かだ。ところが、急に波がさわがしく荒れだしたかと思うと、行くてにザザーッとものすごい大きな黒い怪物が、にゅうとあらわれた。海の妖怪《海坊主》だ。あっというまに、船ごとのみこんでしまうと、たちまち《海坊主》は姿を消してしまう。海は、なにごともなかったように静かで、空は青くはれわたっている。つい、ちょっとまえ海を走っていた船も船員もキリのように消えてしまったのである。

また、《海座頭》は、船員を手まねきして船を難波させるという、まぼろしの妖怪だ。

〈雪女・しんきろう・おしろいばあさん〉

◀海座頭

〈石川県〉ぐず

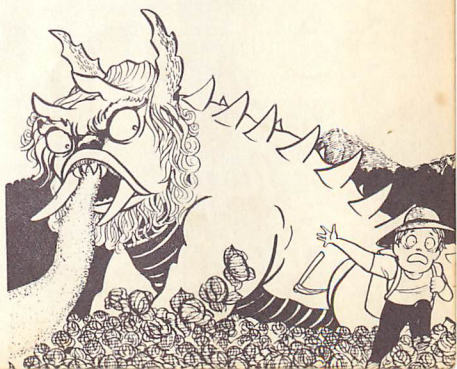
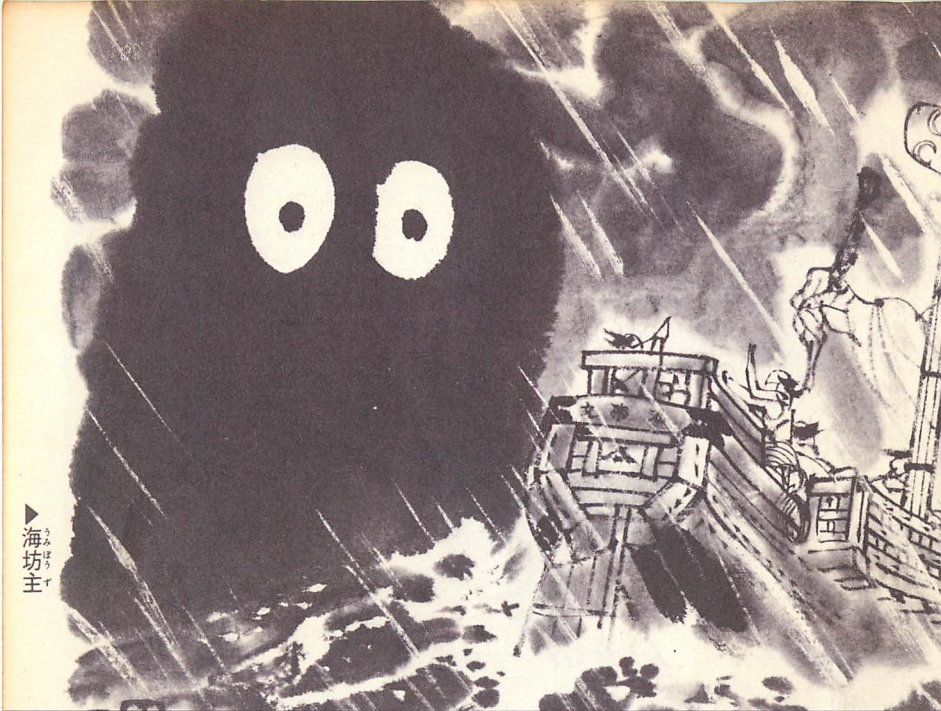
大きな沼にすんでいる。怪獣のような姿で体長は10メートル以上あり胴まわりが5メートルもある。畑や田をめちゃくちゃにふみあらし，農作物をたべてしまう。人間にもおそいかかり，口から毒けむりをはくという。

〈火取り魔・雪女・人魚・みの火〉

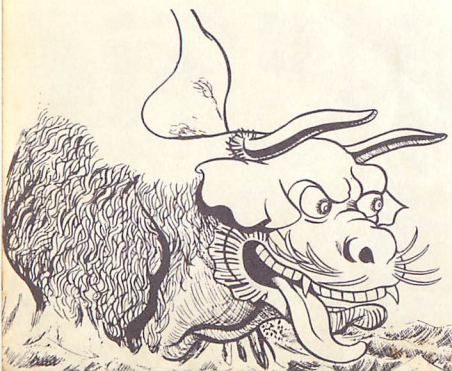
〈福井県〉笑い女

夜中でも昼間でも、ふいに、だれかがケラケラッと笑う声を耳にする。女の笑い声だ。つい、その声にのせられて笑うと、恐ろしいことになる。一回笑うごとに、妖怪・笑い女が、どんどんと大きくなって、ついには大入道のようになるからだ。そして、笑い女が、家ごとおしつぶしてしまうのだ。だから、笑い女の笑いに、つられないことだ。こっちが笑いをとめると、笑い女はスッと姿を消してしまうからだ。

〈人魚・大ハマグリ・鬼女・きつね火・たくろう火〉

▶海坊主

〈富山県〉 海牛

海の深いところにすんでいて、とくに若い娘をえじきにする妖怪。背中からものすごい血をふきだして、海をまっかにそめるという。また、この海牛は若い女に化けて、若い男と結婚すると牛の角をもった赤ちゃんを生む。

〈雪女・人魚・畑おんりょう・鬼女〉

中部地方

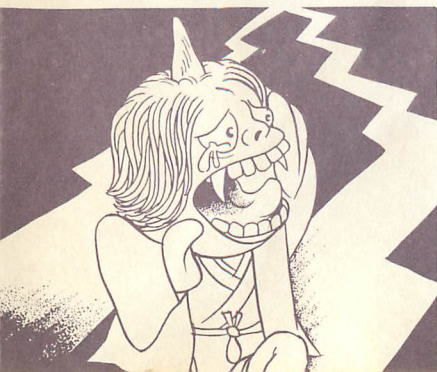
〈長野県〉骨食いきつね

長野県の仙丈が岳という山の近くにある戸台村は、きつね火がたくさんでるというので昔から知られている。野原や雑木林の中、あるいは火葬場のそばで、きつねたちのむれが人間の骨をガリガリッとたべているのだ。そしてきつねのまわりには、青い火の玉が飛んでいる。

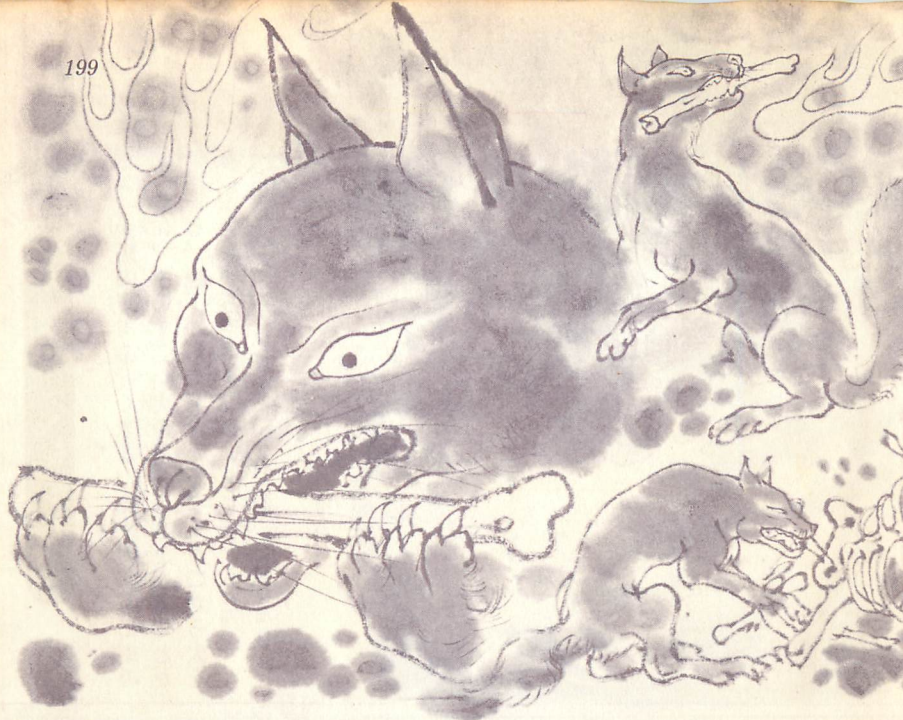
〈さとり・人面鼠・芭蕉の精・天狗〉

〈静岡県〉雷赤子

子供のとき雷にヘソをとられた女の人は，結婚して赤んぼうをうむと，角のはえた雷の子をうむことがある。この子は，ものすごい大きな声で雷のように泣き，ふつうの人が近づくと，たちまち感電死してしまう。

〈きつね火・天狗・天女・化けたぬき〉

〈山梨県〉土ころび

さびしい山道の竹やぶとか，林の中にいる妖怪。人間が２人以上いるとあらわれないが，ひとりで山道を歩いていると，草やかれ葉が急により集まって妖怪の姿になる。うしろから，だきついたり足にまきつくが害はない。

〈山男・ろくろ首・うわん・蛇骨ばばあ〉

〈愛知県〉 大ほたる

戦国時代の有名な武将今川義元が死んだ日になると，ふしぎなことに夜空にあらわれる。大きさが50センチもある大きなほたるで，京都のほうに向かって飛んで行く。これは，今川義元の亡霊が大ほたるになったものらしい。〈鬼女・疫病神・白うねり・竜〉

〈岐阜県〉 みずち

高い山のふもとの湖や沼池にすんでいる。全身に蛇のようにウロコがあって四つ足で，角はない。人間が近づくと，口からねばねばした毒液をだして殺してしまう。しかし，沼や湖の水をひあがらして水をなくすと死んでしまう。〈影馬・土ころび・鬼女・山男〉

近畿地方

〈大阪府〉くもん火

大阪の堺市の近くでは、真夜中ごろに南の空に、ものすごい火の玉がふき上がることがある。地下からでてきた土グモが口から火をふきながら空中高くまい上がるからだ。

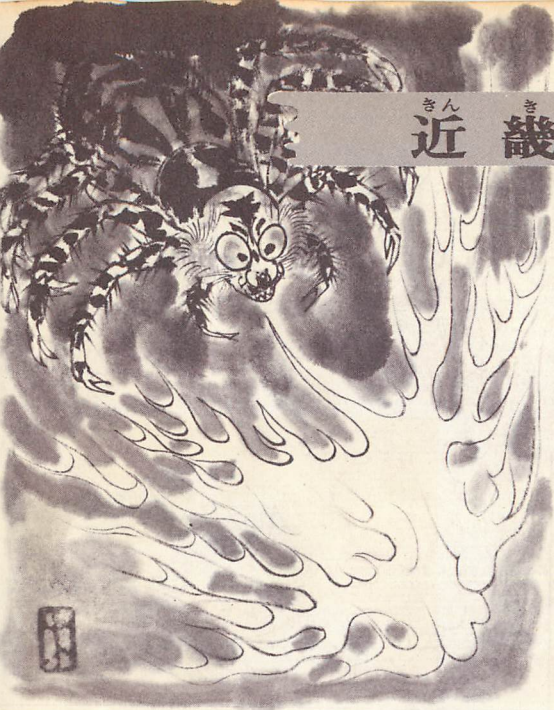
〈おろち・ゲタがえし・油なめ・ももんじい〉

〈京都府〉輪入道

その昔、夕方になると京都の下町のほうから、山のほうに向かって火をふいた妖怪・輪入道が、ごうごうと音をたてながら走って行ったという。これを見た人は、魂をうばわれるので、家の前に『このところ勝母の里なり』という、おまじないの紙をはっておく。

〈ぬえ・鬼・おぼろ車・橋姫〉

〈兵庫県〉大やもり

家をそまつにする人の家に夜中にしのびこんで血をすする妖怪。朝になるとまっかな大やもりが死体のそばにいる。〈長壁姫・お菊虫・天狗〉

〈奈良県〉竹　鬼

奈良県の天理市のあたりに出るという妖怪。竹やぶの中にいて，全身が竹の皮でつつまれている。身長１メートルほどで，夜中に竹をぬすみにくる人をパチパチと竹のムチでたたきのめして，こらしめるという妖怪だ。

〈砂かけばばあ・仙人・鬼・化けがま〉

〈和歌山県〉 白蛇

和歌山の高野山にすんでいる魔力をもった白蛇は，美しい女の姿に化けてあらわれる。男の人をねらって，人間の魂をうばいさるので，バカのようになってしまう。逃げようとすれば，吸血ヒルをなん万とはなって殺す。

〈竜・さとり・天狗・野ぶすま〉

〈滋賀県〉 ギバ

空のほうから馬に乗った美しい女があらわれる。たい馬ともいわれているこの妖怪は，キリのようにぼんやりとした姿で，牧場の馬などを急に三回くるくるっと回して気を狂わせ，倒れたとたんに殺すという恐ろしいやつだ。

〈むかで・鉄鼠・みの火・片輪車〉

〈三重県〉 山ちぢ

夜中にねむっている人をねらって，あらわれる。とがった口ばしで，人間の息をすいとるのだ。目をさまして人がさわごうとすると，氷のような冷たい息をふきかけて人間をこおらしてしまう。人はひび割れて死んでしまう。

〈化け魚・山男・化けたぬき・魂〉

中国地方

〈山口県〉化けがめ

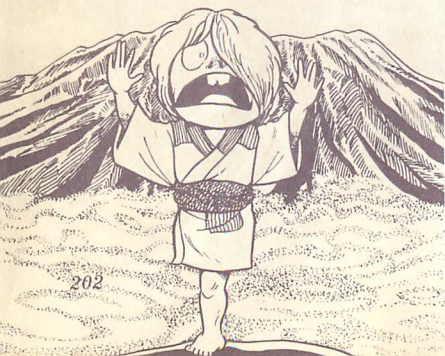
江戸時代のこと。落城すん前の城主の前に一人の美しい女が現われた。その女は、この城の待の血を吸って魔力を持った化けがめだったのである。化けがめは城主への恩がえしにとみるみる巨大なカメとなり、自から大きな島となって、その背中に城を築けという。化けガメは海の中に確かに島となってあらわれたので、城主はそこに城をつくった。

するど敵方の大将が大軍で攻めたところ、島はどんどん動くので、ついに攻めるのをやめたといわれる。

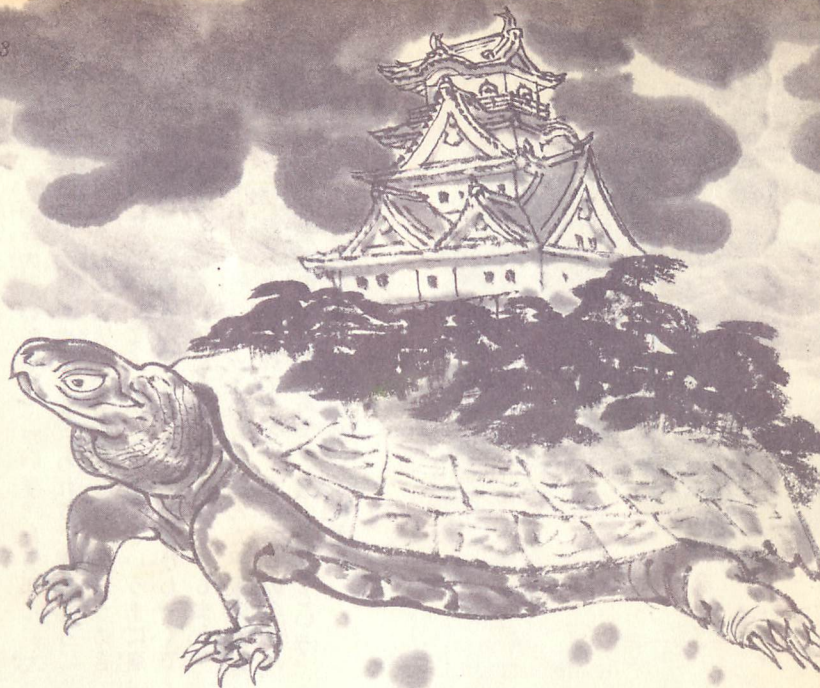
〈海坊主・人魚・一本だたら・白蛇〉

〈鳥取県〉呼子

鳥取県の山の中には，山びこの妖怪がいる。1本足のかわいい子供の姿でヤッホーと声をかけてくる。しかし，その声にうっかりヤッホーと答えると空中にいきなりすいこまれて，山の奥へと運ばれてしまう。

〈牛鬼・人魚・ぬらりひょん・鬼〉

〈島根県〉ずんべら

地面に黒い影のようになって，はいつくばっている。人間の足音をきくとむっくり起き上がって足をとらえ，長い舌でぐるぐると巻いて地面の底にひきずりこむ。ちっそく死させてから，ゆっくりと人間をたべてしまうのだ。

〈八頭の大蛇・ぬれ女・二口女〉

〈広島県〉　もろ首

真夜中に、とつぜんにゅーっとあらわれる、ろくろ首のような妖怪。だがその首は、急に二つにわかれてニタニタと笑いだすのだ。あっちこっちと逃げても、しつこく追いかけてにらむので、人間は気が狂って死ぬという。

〈ぶるぶる・船幽霊・おとろし・鬼女〉

〈岡山県〉　すねこすり

雨のふる夜によくあらわれる。しかし、姿がわからないので、ふせぎようがない。ワタのようなものを人間にからませてくるので、あっところんでしまい足をケガする。岡山県の人は《足まがり》ともいって恐れている。

〈平家がに・鳴がま・なんどばばあ〉

四国地方

〈愛媛県〉船幽霊

瀬戸内海のキリのふかい夜。とつぜん、大きなドクロがぬっとあらわれる。ぼろぼろになった船に死人のむれが悲しげな声でうめきながら近づいてくるのだ。あっというまに漁船は、船幽霊の死人たちに大きなひしゃくで水をかけられ、たちまち沈ぼつしてしまう。これは、昔うらみをのんで死んだ平家の武士の亡霊だといわれている。また、このふきんには海蛇のような〈あやかし〉もいるという。
〈一つ目小僧・おいあがり・ぬえ〉

〈高知県〉三目八面

生首が八つも集まった恐ろしい妖怪で，大きさが100メートルもある。だが目が3つしかないので，逃げるときはジグザグに走って森の中へはいるとよい。この妖怪は，空中にうかんでいて，地上にはおりないからだ。
〈山ちぢ・かげぼうし・犬神〉

〈香川県〉犬神

←犬神には，いつも白児というバカな子供の子分がついている。

生きたままの犬を、首だけだして穴にうめ、おなかをすかしているのに三日間犬のまえに食物をおいておき、それから犬の首をはねたので、犬神という妖怪になったといわれる。犬神は、人間がおいしい食物をあたえないと、たちまち人間の魂にとりつくのだ。犬神に魂をとられた人はワンワンとないて一生をくらすという。

〈山うば・ひひ・しばてん・化けたぬき〉

〈徳島県〉子泣きじじい

山の奥にいる妖怪で，姿は白いひげをたらした老人だが，オギャーと赤んぼうの声で泣く。人がかわいそうにと思って，だいてやると急に鉄のかたまりのように重くなる。しがみついてはなれないので，人の命もうばう。

〈首なし馬・山うば・手あらい鬼〉

九州地方

〈福岡県〉ぬりかべ

海岸によくでる妖怪で、夜道を歩いていると、急に目のまえに白いかべが立ちふさがる。棒で足もとをはらうと消える。〈河童・紫女・人魚・砂かけばばあ・鬼〉

〈沖縄県〉さかさ幽霊

木の上から急に、ぶらりとぶらさがるさかさ幽霊は、その舌でぺろりと人の顔をなめる。〈マー・天女・人魚・火の王・死霊〉

〈佐賀県〉田がらし

頭のてっぺんから足のさきまで，どこにでも口がある妖怪。まるで海綿のように，その口から水をすいこむが，いくら水をのんでも大きくならない。田や畑や井戸にすんでいて，水をすいとるので，作物がたちまちかれてしまう。〈おろち・河童・いそ女・石なり姫〉

〈大分県〉山女

山の奥にいるので，山の神ともいわれる。髪の毛がものすごく長くて，まっ白いはだがゴムのようにふわふわしているが，とくに男の人をねらう。山女の命令どおりにしないと，全身がくさる。この地方には，山男もいる。〈天狗・河童・山男・仙女・犬神〉

〈宮崎県〉 ぬりぼう

山の奥にいる妖怪で，はじめは小さな黒いかたまりだが，人間が近づくと急に大きくふくれあがる。人間の内臓をつなぎあわせたような恐ろしい姿に変化するのだ。そして人間のはらをえぐって内臓をたべるという。

〈山男・河童・あまのじゃく・犬神〉

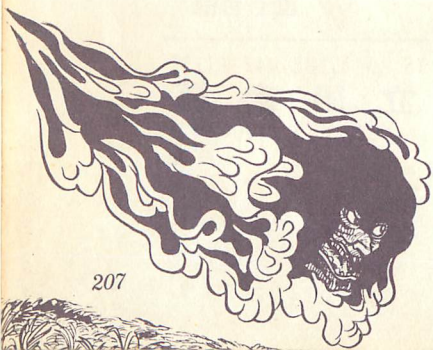
〈熊本県〉 金主

とくに天草地方によくでる妖怪で，おじいさんのような姿をしていて大きなザルをかかえている。夜になると，よいことをした人の家にしのびこんでザルの中の小判をバラバラまきおとして行くという福の神である。

〈不知火・河童・ろくろ首・おろち〉

〈鹿児島県〉 ぬけ首

この妖怪は，人ごろしをした人間だけをねらって追いまわすというふしぎな能力をもっている。口から火をふきだし，空中を飛びまわるので，どこへ逃げてもかぎつけられる。大声で罪を白状すると，ぬけ首は消えるという。

〈山童・大だこ・河童・赤鬼・海蛇〉

〈長崎県〉 いそ女

ぬれ女とよくにているが，下半身が人魚の形をしていて，長崎県の五島列島にあらわれる。船をおそって，生きた人間の血をすうのを好む妖怪だ。おまじないに，カヤの毛を3本だけ着物につけておくと逃げて行くという。

〈火吹き鳥・河童・竜・あやかし〉

日本妖怪図鑑

編　著　佐藤有文
装　幀　長谷部敏雄
イラスト　石原豪人　木俣清史
河内功　直野祥子
資料協力　斉藤守弘　土屋不二雄
面谷哲郎
東京都品川区東五反田3－6－18　電話(03)447－1191
立風書房

妖怪チャンピオン
動物の妖怪
人間の妖怪
人獣の妖怪
妖怪出現の記録
百鬼妖魔
日本妖怪地図
妖怪学
立風書房